



上神宮ノ前遺跡発掘調査報告書

平成10年度

倉吉市教育委員会

かずわみやのまえ

上神宮ノ前遺跡発掘調査報告書



遺跡略号 4 Y KM

平成10年度

倉吉市教育委員会

<10>0100572452

序

この報告書は、民間の宅地造成工事に伴う事前調査として、倉吉市教育委員会が、鳥取県倉吉市上神宇宮ノ前において実施した発掘調査の記録です。

今回の発掘調査により、多量の日常土器とともに古墳時代後期から奈良時代のものと推定される土製人形・動物形、手捏土器等の祭祀遺物、祭祀に使用したとみられる奈良期土器窓・甕・瓶・土製支脚が出土しました。これらの遺物は、祭祀後に廃棄したものと推定します。その他、特筆すべき遺構としては土師器を焼成した土坑を確認しました。

同じ上神地内では、谷畑遺跡で土製模造品を中心とした祭祀遺物が出土し、国の重要文化財に一括指定され、クズマ遺跡やイガミ松遺跡でも土製模造品が出土しています。この地区は、これまで以上に祭祀遺物が密集することが再確認されました。

この報告書が、多くの方々に活用され文化財の研究、理解を深めていただく一助となれば幸いに思います。最後に、調査に際しましてご協力いただいた地権者の加藤辰巳氏をはじめ関係各機関及び各位に対し、感謝の意を表するものです。

平成11年3月

倉吉市教育委員会

教育長 足羽一昭

例 言

1 本報告書は、平成10年度に倉吉市教育委員会が、民間の宅地造成工事に伴う事前調査として実施した発掘調査の記録である。

2 発掘調査団は次のような組織・編成である。

団 長 足羽 一昭（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員 名越 勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

調査員 横鉢 煙雄（倉吉博物館主任学芸員） 真田 廣幸（文化課課長補佐兼文化財係係長）

森下 哲哉（文化財係主任） 根鉢智津子（文化財係主事）

加藤 誠司（文化財係主事） 岡本 智則（文化財係主事）

岡平 拓也（文化財係主事）

調査補助員 山根 雅美・松田 忠子

事務局 新田 征男（教育次長 6月まで） 波田野頌二郎（教育次長 7月から）

山脇 将暉（教育次長兼文化課課長） 藤井 敬子（文化財係主任 7月から）

山崎慎之助（文化財係主事 6月まで） 福澤 昌子（文化財係主事）

金田 朋子（臨時職員）

内務整理 泉 美智子・世浪由美子・妻藤 君江・松鷺あつ子・竹歳 瞳子・山本 銘

3 現場での調査は加藤が担当し、山根が補佐した。遺構の図面整理は加藤・松田が担当した。遺物実測は、加藤・根鉢智津子・岡平・山根が担当した。写真撮影は加藤が担当し、森下・岡本・岡平・松鷺・竹歳・山本が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤が担当した。

4 本書の執筆は加藤・根鉢智津子（目2 遺物 須恵器）が担当した。編集は加藤・松田が担当した。

5 遺構測量のための基準枕設置を西谷技術コンサルタント株式会社に委託した。

6 第1図（地形図）は、建設省国土地理院発行の1：25,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆したものである。第2図は、平成9年修正測量の1：2,500国土基本図 倉吉市平面図を使用した。

7 掘図中の方位は、国土座標第V座標系の北を指す。

8 遺物に付した記号・番号は本文・掲図・図版で統一している。

9 発掘調査によって得られた資料は倉吉博物館で保管している。

本文目次

I	発掘調査に至る経過	1
II	位置と歴史的環境	1
III	調査の概要	4
1	遺構	6
2	遺物	24
IV	まとめ	47
報告書抄録		

挿図目次

第1図	倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	3
第2図	上神宮ノ前遺跡調査区位置図	5
第3図	調査方法	6
第4図	上神宮ノ前遺跡遺構全体図	7
第5図	1号土坑遺物出土状況図	10
第6図	1号土坑遺構図	11
第7図	祭祀関連遺物出土分布図	13
第8図	祭祀遺物集中区出土状況図	15
第9図	1号～3号掘立柱建物遺構図	20
第10図	1号住居遺構図	22
第11図	1号～3号貯蔵穴、1号・2号落し穴遺構図	23
第12図	1号土坑出土遺物	25
第13図	土製人形、動物形	26
第14図	手捏土器・ミニチュア土器	27
第15図	祭祀関連遺物	28
第16図	奈良期土器・須恵器・弥生土器（庄内期）・石鍤	29

I 発掘調査に至る経過

平成8年4月鳥取県倉吉市和田、加藤辰巳氏から倉吉市上神宇宮ノ前での宅地造成計画が倉吉市教育委員会に提示された。現地踏査を実施したところ踏査地全域において濃密な遺物散布を確認したため、試掘調査を平成9年4月16日から5月6日まで行った。⁴¹⁾この結果、尾根筋部分は既に搅乱や削平によって遺跡は遺存していないなかつたが、西側の谷部分で土馬・手握土器とともに多量の土器が出土し、祭祀遺跡の存在が想定された。倉吉市教育委員会は、加藤辰巳氏と協議を行い、2,000m²について発掘調査を実施することになった。発掘調査は、倉吉市教育委員会が主体となり、平成9年11月11日から平成10年3月23日まで実施した。

註 森下哲哉 「上神地区（上神宮ノ前遺跡）」『倉吉市内遺跡分布調査報告書X』 倉吉市教育委員会 1999

II 位置と歴史的環境

上神宮ノ前遺跡は、倉吉市街地から北西に約5km離れた倉吉市上神宇宮ノ前に所在する。遺跡は、東伯郡北条町にある鷹ヶ家山（標高171.1m）から南に派生する丘陵裾部の尾根に挟まれた浅い谷部分に位置し、標高は約34m～38mで、周辺の水田面より約10m高い。

上神宮ノ前遺跡の周辺は、遺跡が密集する地域である。以下、上神周辺を中心述べる。

旧石器時代の遺構は未確認であるが、上神51号墳(11)・高鼻2号墳では調査中に細石刃石核が出土し、中尾遺跡(36)・長谷遺跡でナイフ形石器が出土している。



調査前全景（南西から）

縄文時代の遺跡は、取木遺跡(44)で前期の焼石群と堅穴式住居・平地式住居が各1棟出土した。

弥生時代の遺跡は、遠藤谷峯遺跡・中峯遺跡・白市遺跡など通称久米ヶ原丘陵上に分布し、その多くが古墳時代に存続する。墳墓は、前期の土壙墓としてイキス遺跡(43)、後期には、四隅突出型墳丘墓の可能性がある柴栗古墳群(29)の弥生墳丘墓、手培形土器の出土した三度舞墳丘墓(30)、古墳系の大型壺が出土した大谷後谷墳丘墓がある。

古墳時代前期の盟主墳は、舶載鏡三面と豊富な鉄製農工具が出土した国分寺古墳（前方後方墳・復元全長60m）、大谷大将塚古墳（39・前方後円墳・全長50m）、鐵形石や琴柱形石製品の出土した上神大将塚古墳（28・円墳・直径30m）がある。その他の前期古墳は、カスガイ状の周溝を持つ方墳群が出土した猫山遺跡(27)がある。

5世紀代の古墳には、イザ原古墳群(32)・沢ベリ古墳群(33・34)がある。古墳時代後期には上神周辺に群集墳が多く築造される。クズマ遺跡(15)は、横穴式石室を内部主体とする6世紀後半～7世紀の円墳群で、9基について調査され古墳周溝上面から祭祀遺物が出土している。古墳時代終末期には、取木遺跡・一反半田遺跡(45)・両長谷遺跡(49)で小型の横穴式石室をもつ多角形墳がある。

古墳時代の集落としては、クズマ遺跡・西山遺跡(13)・西前遺跡(22)・猫山遺跡がある。西山遺跡は、同じ時期の古墳と住居が同一丘陵上にある遺跡で、土馬・土鈴・双孔円板等の祭祀遺物が出土した。この遺跡からは、谷に下る道と推定される造構を確認しており、谷部分に存在する祭祀遺跡の谷畠遺跡(12)との関連が指摘されている。その他、7世紀代の集落としては、観音堂遺跡・平ル林遺跡(21)・西前遺跡(22)がある。

祭祀に関連する遺跡は、上神地内に谷畠遺跡・イガミ松遺跡(14)・クズマ遺跡があり、市内では矢戸遺跡1次・福田寺遺跡2次・芸才寺1号墳・大山遺跡D地区・耳古墳群、その他羽合町の長瀬高浜遺跡がある。

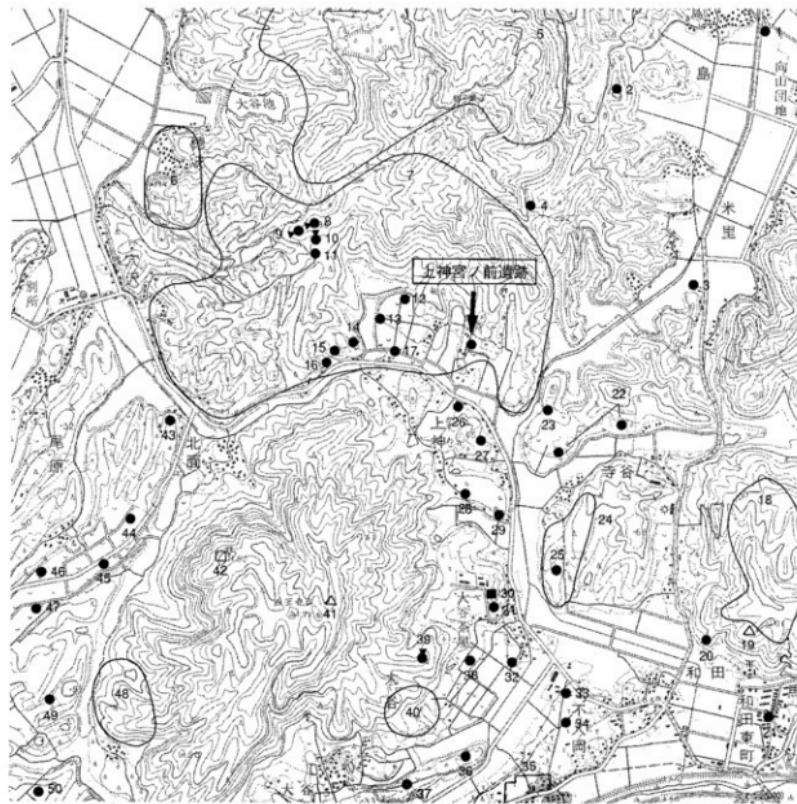
谷畠遺跡は、丘陵にはさまれた谷の一一番奥に存在する。祭祀遺物は2箇所に集中し、器種構成と時期に違いがある。どちらにも手捏土器が出土しているが、東側の集中部分は、土製人形と動物形を中心に有溝円板や土製鉤状が6世紀末の土器とともに出土した。遺物集中部分の中心には何もない部分があり、木の根元に集めた状態であると考えられている。西側集中部分では土製支脚・竈とともに土製鏡形や丸玉・メノウ製勾玉が、7世紀前半の須恵器を伴って出土している。これらの遺物は、一括して国の重要文化財に指定されている。

クズマ遺跡は、古墳の周溝上面と古墳間の平坦地から7世紀後半と推定される人形・土馬・手捏土器・有溝円板・奈良期土器窯・竈・土製支脚が出土している。

イガミ松遺跡は、土製人形・馬形・器財形・高坏形・竈形・有溝円板・手捏土器が採集されているが未発掘のため詳細は不明である。

矢戸遺跡1次は、住居跡から土馬・手捏土器・竈が出土した。福田寺遺跡2次は、土壤の埋土中から土馬・手捏土器・竈・土製支脚が出土した。芸才寺1号墳は手捏土器が出土した。大山遺跡D地区は2号墳周溝底で竈が出土した。耳1号墳は、横穴式石室の前庭部にあたる位置で、奈良期土器窯・土製支脚・竈の破片が出土した。長瀬高浜遺跡は、7号墳の上横内から土製勾玉・馬形・棒状が出土、また素文鏡・ガラス小玉と併に剣先型鉄製品が約40個出土するなど多くの祭祀遺物が出土した。

寺院跡は7世紀中頃に大御堂廃寺・野方廃寺・弥陀ヶ平廃寺（東郷町）が建立される。7世紀後半には大原廃寺・斎尾廃寺（東伯町）が、8世紀に入り石塚廃寺が建立される。8世紀後半頃には、伯耆国衙・伯耆国分寺・国分尼寺（法華寺焼跡）が近接して設けられ、さらには、国衙関連の物資収納施設とみられる不入岡遺跡(35)が造られて伯耆国を中心としたとなる。



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

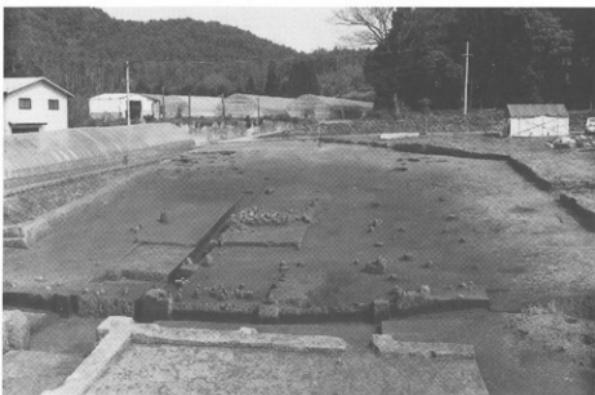
1 島遺跡	11 上神51号墳	21 平林遺跡	31 イザ原遺跡	41 大谷城跡
2 島古墳群	12 谷側遺跡	22 西前遺跡	32 イザ原古墳群	42 四王寺跡
3 米里劍舞出土地	13 西山遺跡	23 トドロケ遺跡	33 沢ベリ遺跡 1次	43 イキス遺跡
4 曲226号墳	14 イガミ松遺跡	24 屋喜山古墳群	34 沢ベリ遺跡 2次	44 取木遺跡
5 曲古墳群	15 クズマ遺跡	25 屋喜山 9号墳	35 不入間遺跡	45 一反半田遺跡
6 穂波古墳群	16 上神119号墳	26 東荻岡古墳	36 中尾遺跡	46 コザンコウ遺跡
7 上神古墳群	17 桜木遺跡	27 獅山遺跡	37 中尾遺跡 2次	47 道振神峰遺跡
8 上神44号墳	18 夏谷遺跡	28 上神大将塚古墳	38 小林古墳群	48 古墳群
9 上神45号墳	19 和田城跡	29 萩栗古墳群	39 大谷大将塚古墳	49 両長谷遺跡
10 上神48号墳	20 中峰古墳群	30 三度舞古墳丘墓	40 大谷古墳群	50 速藤谷峯遺跡

III 調査の概要

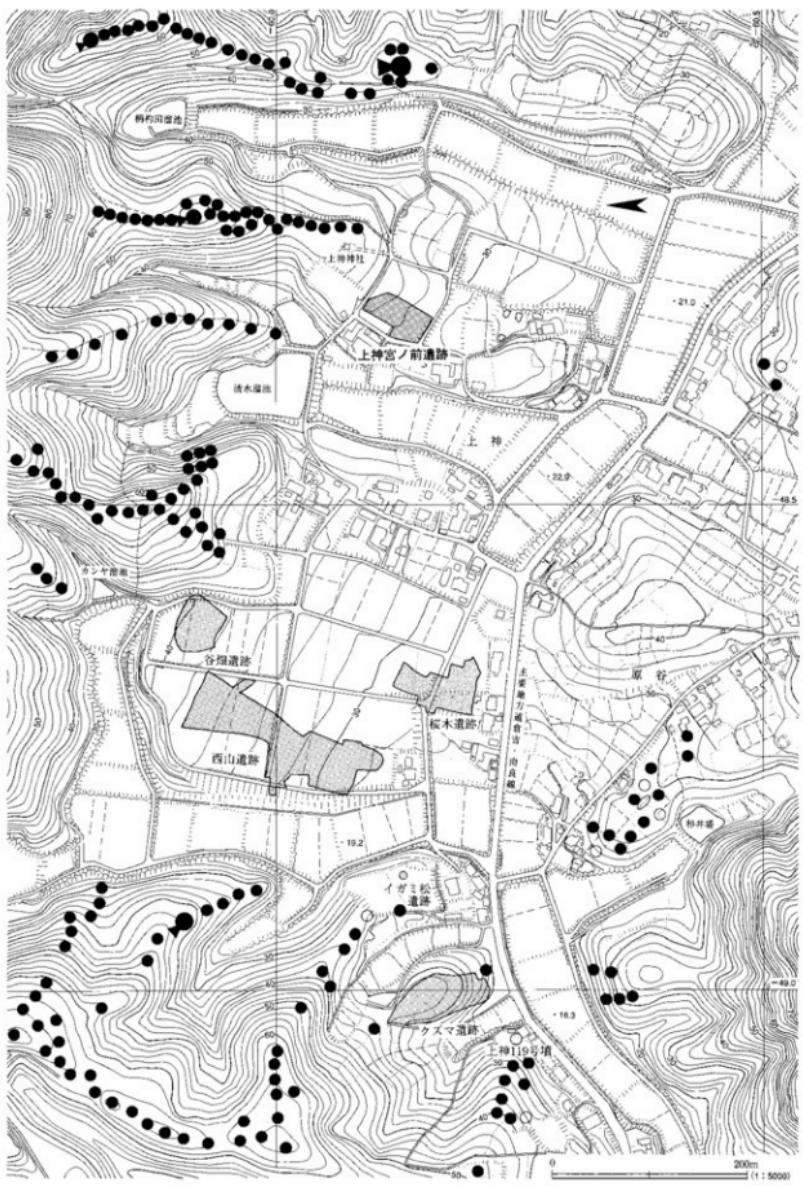
調査は、まず重機により調査範囲全域の2,000m²について表土を除去し、次に試掘調査で確認した谷地形の傾斜に方向を合わせて4mの方眼を組んだ。そして、北から南に1~18、西から東にA~Kと振り、1A・1Bとグリッド名を付け、グリッド毎に人力による掘り下げを行った。掘り下げは、遺物包含層の厚さが不明であったため、谷の中央を十字に走る東西方向の13グリッドラインと南北方向のFラインを優先し、厚さと遺物量を確認した。この結果、十字の中心の谷地形は、幅約34m、周辺の地山レベルから深さ約1.5mの南西に浅く開き、非



調査後全景（北東から）



調査後全景（南西から）



第2図 上神宮ノ前遺跡調査区位置図

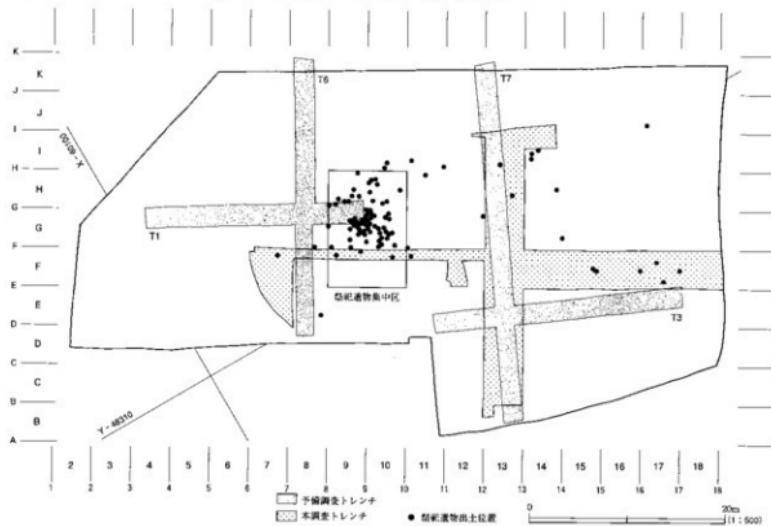
常に多くの遺物を含む層が堆積していることがわかった。したがって、当初の予想以上に調査期間と費用が必要となるため再度協議を行い、13ライン以南については盛土をして保存することになった。13ライン以北については、無遺物層の上面（下記Ⅲ層）まで掘り下げて、調査を終了した。

調査区の基本層序は、上層から、I 明茶褐色土（地山ブロック多く含む）（7世紀～8世紀代の層）、II 淡茶褐色土（5世紀～6世紀代の層）、III 明茶褐色土（縄文・弥生土器の包含層）、IV 黒褐色土（無遺物の層）、V ソフトローム土である。ただし、必ずしも明確に線引きが出来るわけではなく暫移的である。

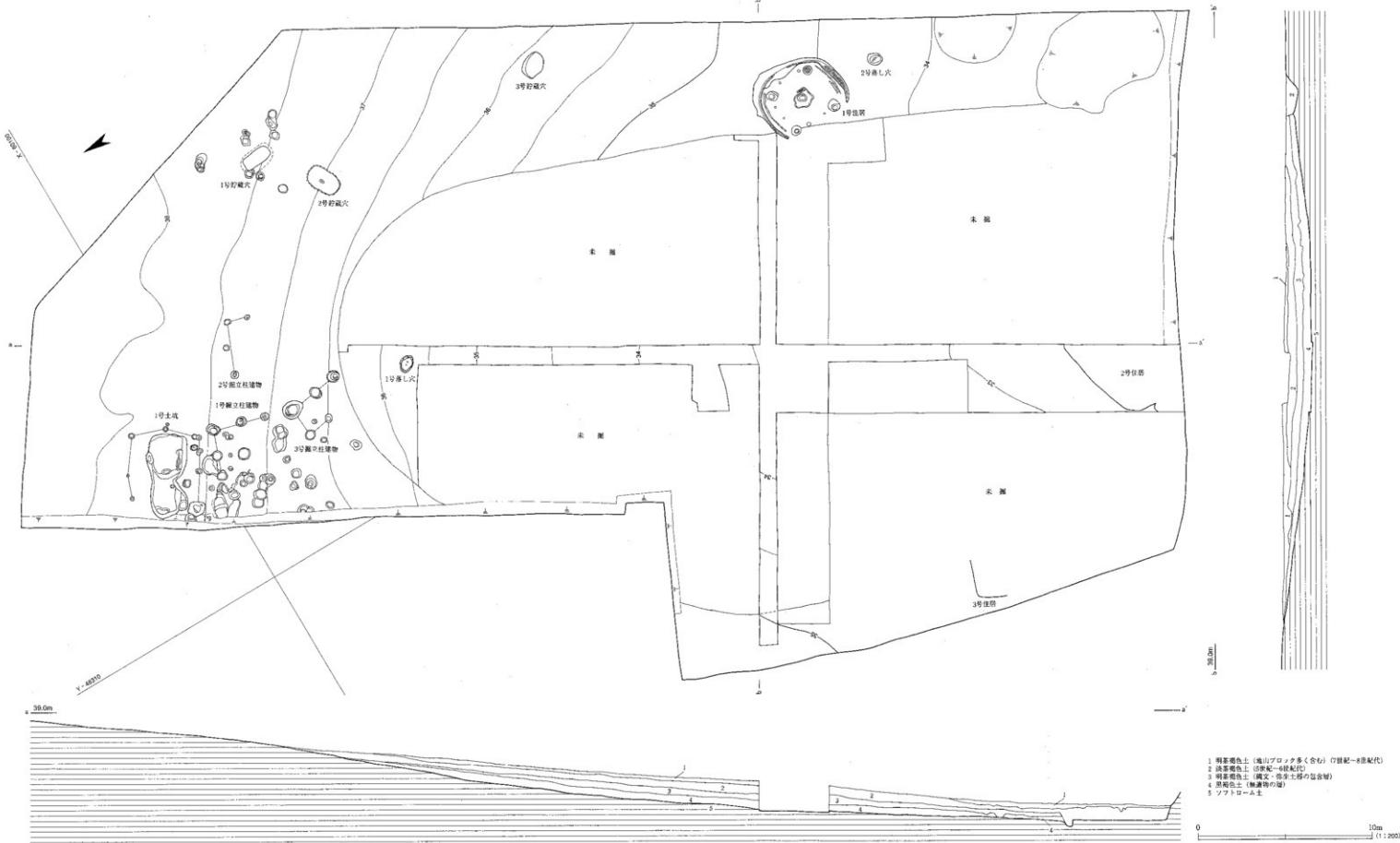
発掘調査の結果、土坑（土師器焼成坑）1基、撲立柱建物3棟、竪穴式住居3棟、貯蔵穴3基、落穴2基、ピット等を確認した。

1 遺構

1号土坑 調査区の北端近くで確認した。平面形は正方形に近い長方形プランの床部に、床部より浅い長方形プランの前部がとりつく。遺構検出面での長さは約4.80mで、床部の長さ約2.58m・幅約2.08m・深さ約0.68m、前部の長さ約2.25m・幅約2.10m・深さ約0.38mである。床部は、前部に比べ約0.20m深く、焼土面と炭化物が広がり、左右の側壁際と前部との境目に梢円形のピットがある。ピットの大きさは、右側ピットA長径0.68m×短径0.21m・深さ0.06m、左側ピットB長径0.71m×短径0.34m・深さ0.19m、前部側ピットC長径0.50m×短径0.29m・深さ0.06mである。前部にも床面寄りの右側壁側に梢円形の長径0.24m×短径0.20m・深さ0.07mのピットDがある。また、土坑の周囲には、ピットが巡っており土坑に伴う覆屋があったものとみられる。壁面には焼土面は認められなかった。埋土の上層からは焼土が多く出土した。



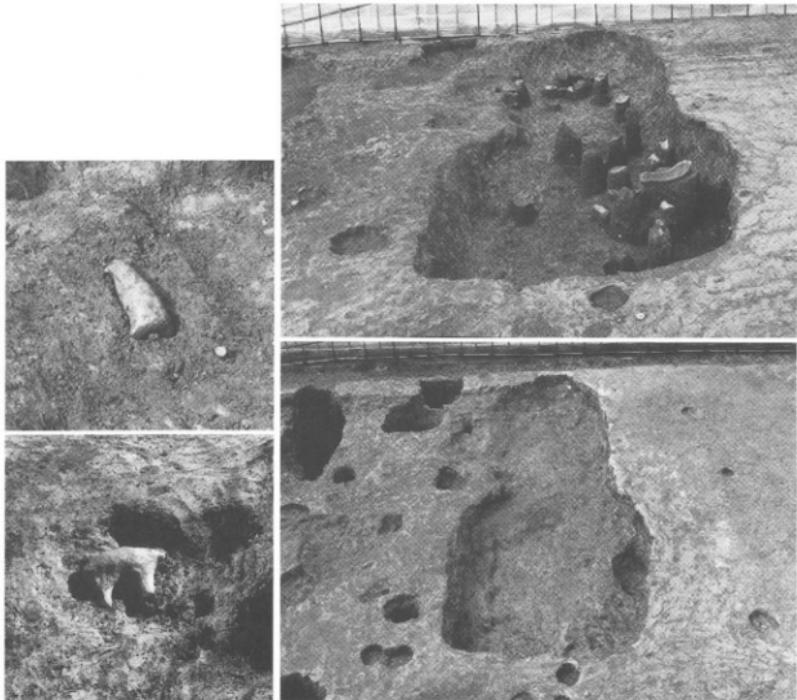
第3図 調査方法



第4図 上神宮ノ前遺跡遺構全体図

出土遺物は、奈良期土器甕・土製支脚・土師器坏・壺・須恵器坏などがあるがほとんど埋土中で確認した。出土状況は床部の埋土中で奈良期土器甕・甕・土製支脚が多く出土し、前部でも底面、埋土中から須恵器を含んで奈良期土器甕・甕・土製支脚が出土した。このため、後述する土製人形・動物形以外はすべて陶器遺物と推定される。遺構に伴う遺物としては、床部床面右側のピットA肩部から土製人形(1)が完形でうつ伏せの状態、前部ピットDから土製動物形の体部(2)が、四脚のうち右側の二脚が欠け、欠けた側を下に頭を北にした状態で出土した。なお、1号土坑の南P 9からは手握土器(11)が出土している。

遺構の形態からこの土坑は、土師器焼成坑と推定される。この形態は、「壁と床に被熱痕跡を残す奥壁が直線的になる方形・逆台形・逆三角形などが主体のA類で、奥壁幅に比べ奥壁から前壁までの距離が長いII類の、長方形を呈するもので、前壁をもつタイプb類」²¹⁾に似ている。但し、被熱の度合は弱く、壁面には焼上面が無い点では、C類に似る。土製人形と動物形は土師器焼成に伴い、火の神に対する祭祀を行ったものであると推定する。遺構の造られた時期は、出土遺物からおおむね7世紀末～8世紀前半頃と推定される。

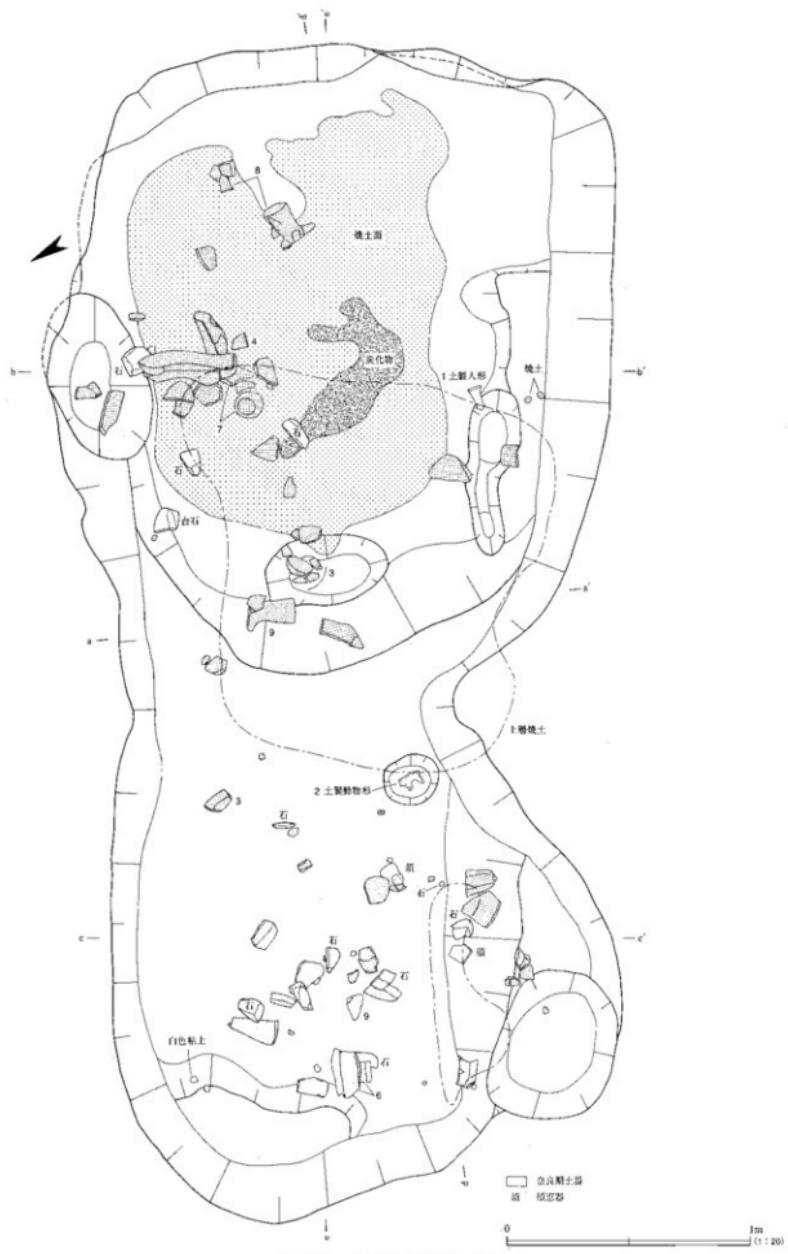


△土製人形(1)出土状況

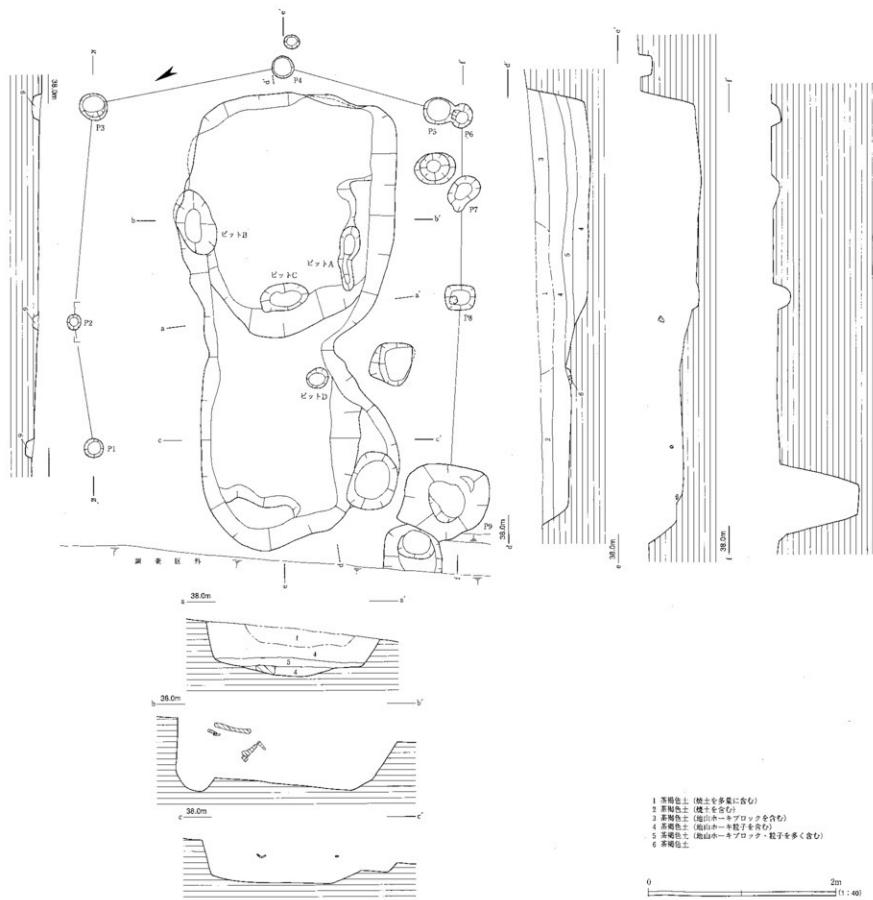
1号土坑(南東から) △遺物出土状況

▽土製動物形(2)出土状況

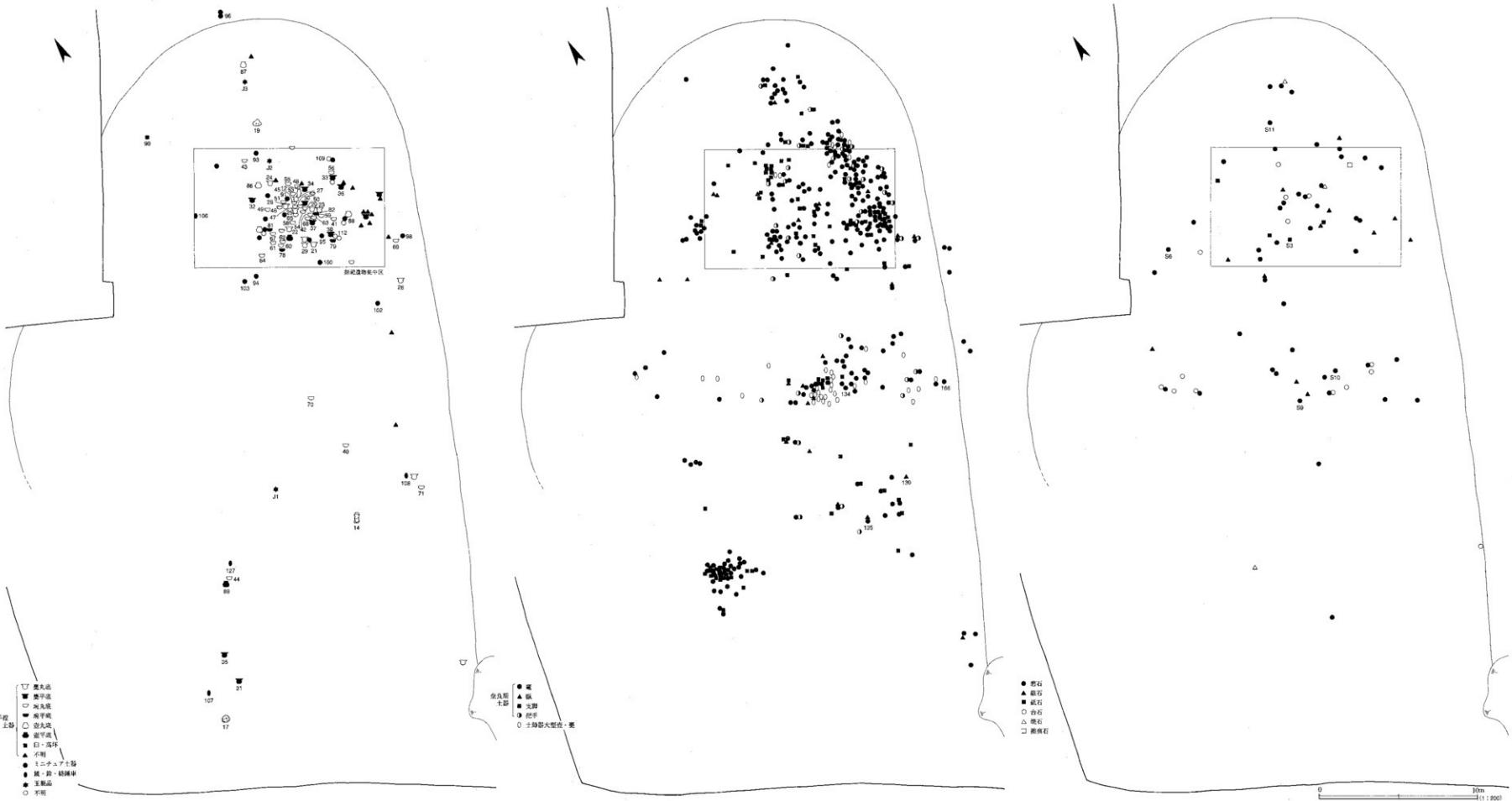
▽完掘



第5圖 1号土坑遺物出土狀況圖



第6図 1号土坑遺構図



第7図 祭祀関連遺物出土分布図



祭祀遺物集中区 遺構としての掘り込みは未確認であるが、多量の日常土器に混じって土製人形・動物形、手捏土器、ミニチュア土器等の祭祀遺物がまとまって出土した。手捏土器と土製人形は9 G ポイントを中心として、東西約12m×南北約9 mの範囲で多く出土した。その出土状況は谷の地形に沿って北から南へ低く、東から西に低くなる。出土のレベルは厚さ最大で約50cm程度である。また、奈良期土器壺・瓶・甕、土製支脚が、9 H・10 H グリッドを中心にしてたくさん出土した。その出土状況は手捏土器と同様に谷の地形に沿って北から南へ低く、東から西に低くなる。出土レベルの厚さは約20cm程度である。手捏土器と奈良期土器壺・瓶・甕、土製支脚は、ほぼ同じレベルで出土した。もう1ヶ所11ライン以南に祭祀遺物のまとまりがあるようであるが、12ライン以南が未発掘である。石製品は、赤色顔料の付着した磨石や砥石などが出土したが、土製品・土器などの集中はみられない。

遺物は破片が多く、すべての種類について復元を試みたわけではないが、復元を試みた奈良期土器壺については殆ど接合しなかった。その形態は日常用の土器と同じであるが、祭祀遺物の集中部分とほぼ重なり、まとまって出土することから祭祀に使用したとみられる。手捏土器と奈良期土器壺・瓶・甕、土製支脚の出土層位には違いが無く、出土レベルでは新旧はわからなかった。手捏土器と、奈良期土器壺・瓶・甕、土製支脚付近で出土した須恵器は、T K217前後に比定される。このため、手捏土器の時期は7世紀頃と推定する。その他、10 G・11 G グリッドを中心に土師器高坏と小型丸底甕が集中して出土した。土器の形態は日常用の土器と同じで、ほぼ完形に復元できた。高坏の時期は5世紀前半頃である。土器の出土状況から、祭祀に使用した土器と推定される。また、付近で出土した古墳時代の壺・甕の中には焼成後の穿孔をもつ遺物が存在する。

8 G グリッド周辺

(南から)



8 G グリッド周辺

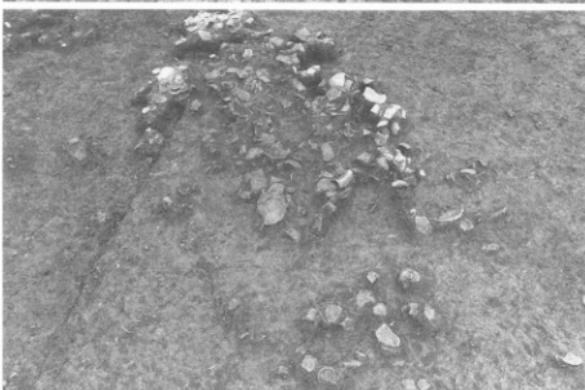
(南から)





10G グリッド周辺

(南から)



8 G グリッド周辺

(南東から)



8 G グリッド周辺

(東から)



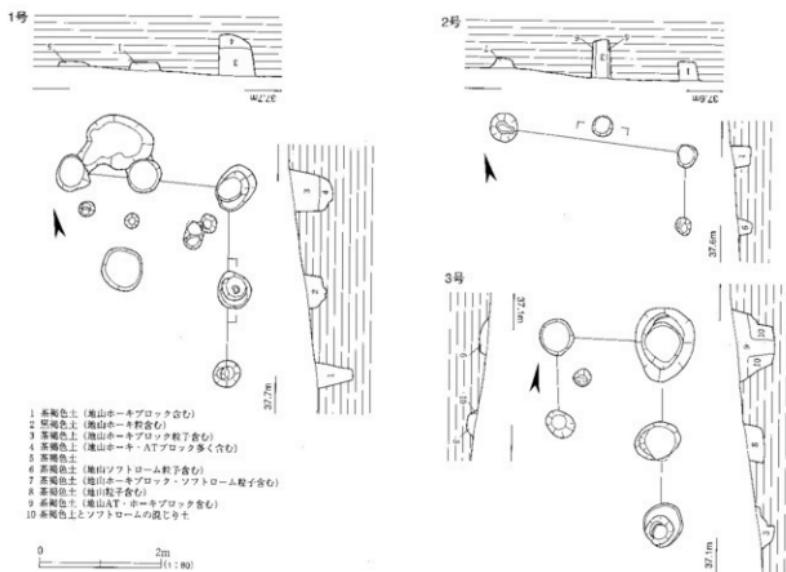
10G グリッド周辺
奈良期土器集中部分
(南西から)



11II グリッド周辺
古墳時代の層
(南から)



8 G グリッド周辺
古墳時代の層
(東から)



第9図 1号～3号掘立柱建物遺構図

掘立柱建物 調査区の北側、1号土坑の南側で3棟を確認した。この付近はピットを多く確認したが、復元できたものは3棟であった。これ以外にも掘立柱建物があったものと推定される。建物規模は、斜面の低い側の南西部分が未検出のため不明であるが、1号掘立は東西2間×南北2間分、2号掘立は東西2間×南北1間分、3号掘立は東西1間で南北2間分を確認した。これら建物の柱穴埋土中からは、4世紀～6世紀の土師器壺・高坏の破片、奈良時代の甕・甕・土製支脚の破片などが出土した。

竪穴式住居 住居は調査区の南半分から3棟確認した。この内、完掘した住居は1号住居だけで、2号住居と3号住居は、輪郭を確認したのみで盛上保存とした。遺構検出面は、いずれも地山のソフトローム上面であるが、2号住居はFラインの断面観察で、住居埋土がⅢ層明茶褐色土を切ることが分かった。

1号住居 調査区中央の東端に位置する。平面形は隅丸方形で、住居の西側については、東から西に向かって低くなる地形のため、地山まで遺構の掘り込みが無く、断面で立ち上がりを確認したが留まつた。床面の規模は南北4.72m×東西(3.54m)、最大壁高0.60m、主柱はP1～P4の4本で、西、北、東には間柱が2本ないし3本ある。この内P1の底は貼土をしている。床面は、貼床と焼土面を確認した。周壁溝は2条確認した。内側が当初の溝で外側は拡張後の溝である。外側溝は最大幅0.12m・深さ0.04m、内側溝は最大幅0.10m・深さ0.03mである。

遺物は、P1、P12の埋土中や床面から阿弥大寺Ⅲ期に比定される弥生土器の壺口縁部・高坏が出上している。³³⁾ 1号住居の造られた時期は弥生時代後期後葉と推定される。

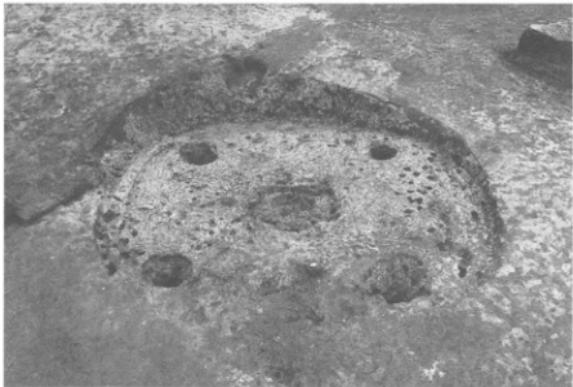
2号住居 調査区の南端に位置する。平面形は、東西約6m程度の隅丸方形もしくは隅丸長方形とみられるが、未掘のため詳細は不明である。遺物は、遺構検出面とその上層で、長瀬Ⅲ期に比定される土師器がまとめて出土した。



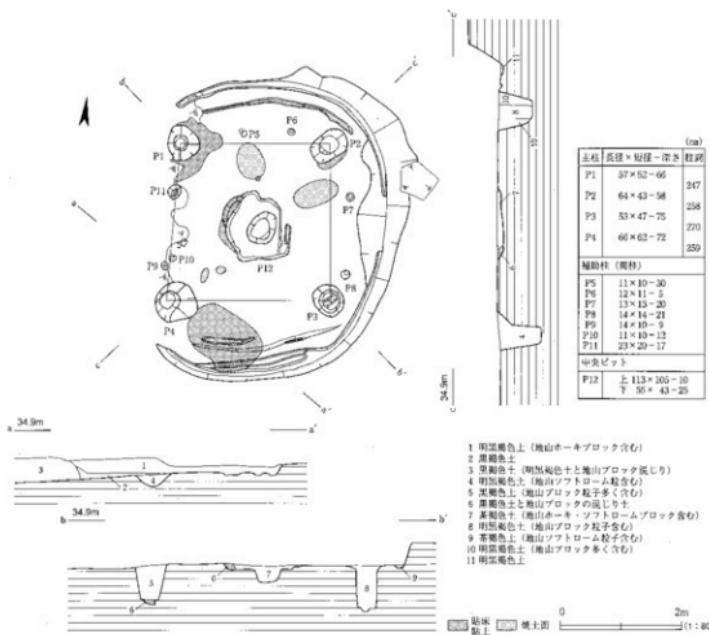
1号・2号掘立柱建物
(南から)



1号・2号掘立柱建物
(東から)



1号住居 (西から)



第10図 1号住居遺構図

3号住居 調査区南西部に位置する。平面形は方形とみられ、東西方向と南北方向にそれぞれ約2m分検出したが、未掘のため詳細は不明である。出土遺物は未確認である。

貯蔵穴 調査区の東側で3基確認した。1号貯蔵穴・2号貯蔵穴の平面形は隅丸長方形で、いずれもオーバーハングし、2号貯蔵穴は底面中央にピットがある。3号貯蔵穴はかなり削平されてしまっているが、平面形は円形で断面形がフラスコ状になるものとみられる。貯蔵穴の造られた時期は、出土遺物が無いため不明である。(規模などの数値は表に記載した。)

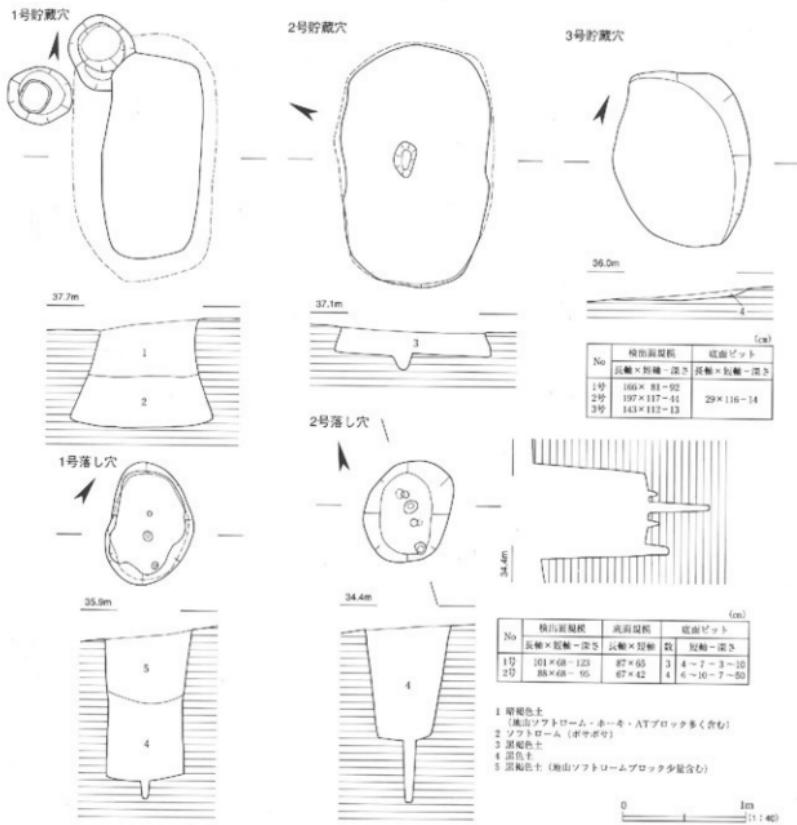
落し穴 調査区北寄りと南東端で1基ずつ、2基を確認した。遺構検出面はV層ソフトローム土上面である。ともに平面は梢円形で、底面には南北方向に直線的に杭痕跡が並ぶ。落し穴の造られた時期は、出土遺物が無いため不明である。(規模などの数値は表に記載した。)

註

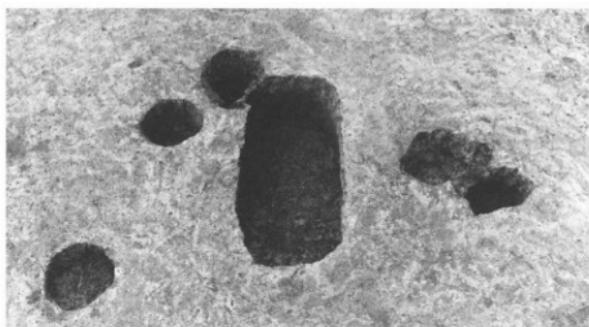
- 望月精司 「第2節 土器焼成坑の分類」「古代の土器焼成工場と焼成遺構」 空研研究会 1997年
- 田迎昭三 「陶邑古窯址群Ⅰ」 平安学園考古学クラブ 1966年
- 真田廣幸他 「上米積遺跡群発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1980年
- 鶴鳥取県教育文化財団編 「長瀬高浜跡発掘調査報告書Ⅲ・IV・V・VI」 鶴鳥取県教育文化財団 1981年・1982年・1983年参考文献

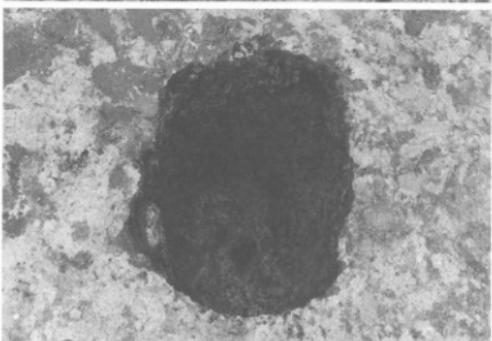
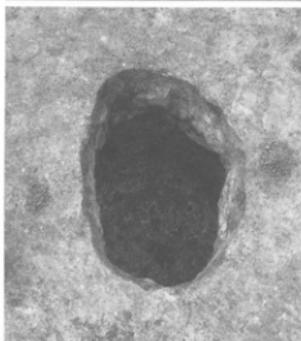
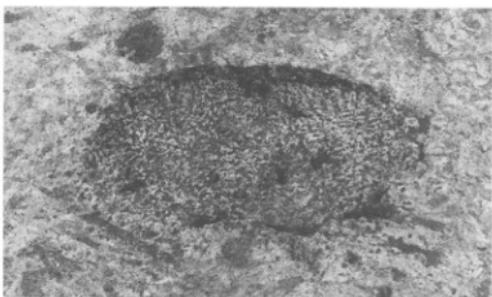
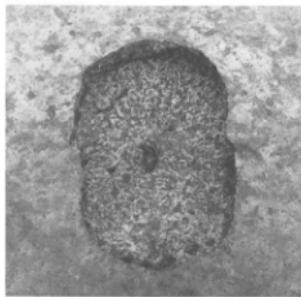
根鈴輝雄 「第二項 郡土の祭祀遺跡」(「新編 倉吉史」第一巻古代編) 1996年

倉吉博物館編 「まつりの造形—古代彩代の世界—」 倉吉博物館 1997年



第11図 1号～3号貯蔵穴、1号・2号落し穴遺構図





△ 2号貯蔵穴（西から）

△ 3号貯蔵穴（西から）

▽ 1号落し穴（南から）

▽ 2号落し穴（南から）

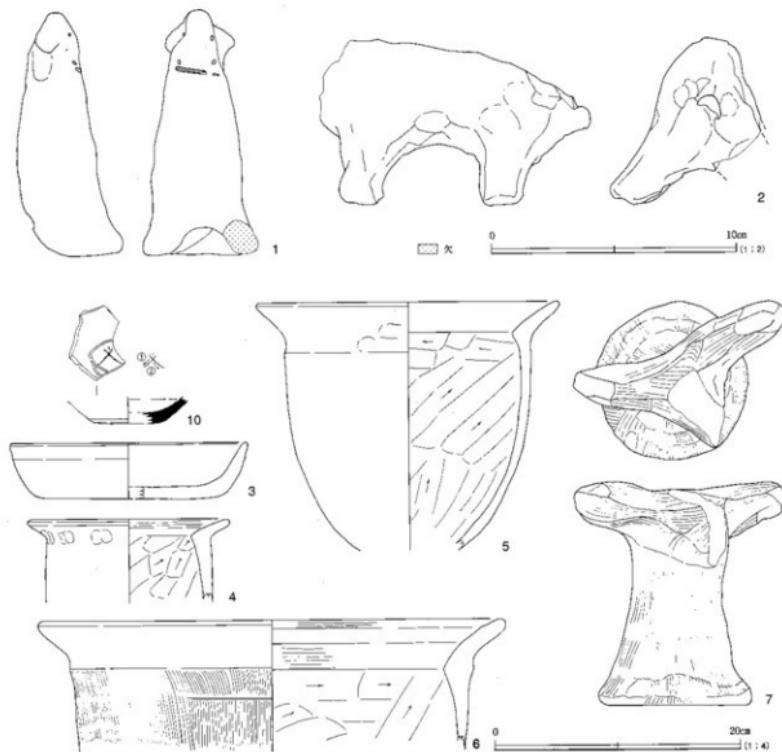
2 遺物

土器・石製品は谷部分から非常に多く出土した。その分布は主に谷の東半分側に集中する。ほとんどが日常土器で、遺物の時期は縄文時代晚期・弥生時代後期・古墳時代から奈良時代と幅広い。土器の中には庄内期の搬入土器とみられる高坏や甕、暗文をもつ畿内系の坏も出土した。

遺跡全体で出土した土製の祭祀遺物の種類と数は、土製人形2、土製馬形3、土製動物形7、手捏土器199(壺41・塊65・壺6・高坏1・臼2・小片84)、ミニチュア土器44(壺7・壺12・高坏14・低脚坏1、土製支脚10)、土製鏡形2、土製鉢形1、器種不明器財54、土製紡錘車1、土玉3の合計316である。石製の遺物で祭祀遺物の可能性がある遺物としては、石製紡錘車1、勾玉1、砥石20、蔽石18、磨石98、擦痕のある石2、石皿1、台石20、焼石7の合計168出土した。磨石の中には、赤色顔料が付着する石が2個含まれる。祭祀遺物以外では、石塹、打製石斧、石廻丁が各1個出土した。

以下、報告書に掲載したもので主なものについて種類別に述べる。

土製人形(1・12) 1は全長10.1cmで円錐形の胴体に脚と耳をつまみ出し、目と鼻を刺突で、口を直線の刻みで表現する。手の表現はしていない。12は、耳と手をつまみ出し、目と鼻と口を刺突によって表現する。下半身は欠損し、残存長は10.6cmである。



第12図 1号土坑出土遺物

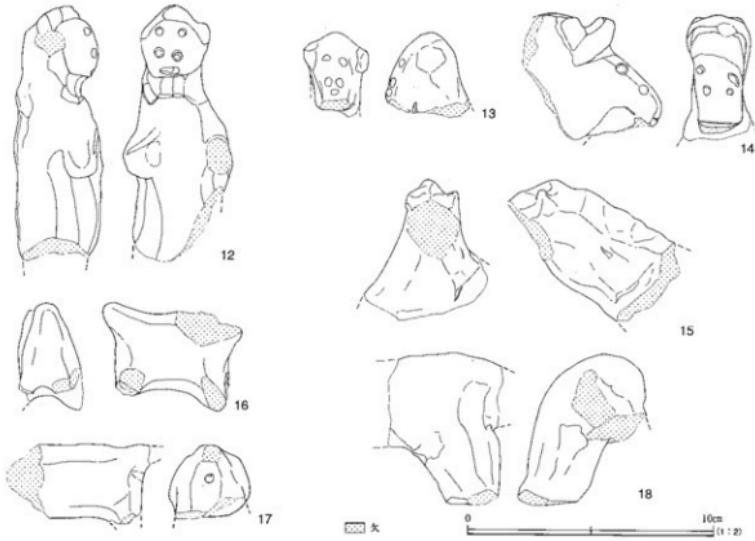
土製動物形(2・13~19) 四肢を踏ん張り尻尾をつまみ出す小型のもの16・17とこれ以外より大型のものがある。13・14は馬の頭部で、1号土坑出土の2も馬の可能性がある。15はたてがみのある動物の破片である。19は異形の動物形とみられるもので表面に浅い穴を多数もつ。

手捏土器(11・20~89) 形態によって、口縁部が外方に屈曲し胴部外反のものを壺、口縁部が屈曲せず体部外反のものを塊、口縁部が胴部より小さく作りだすものを盃として取り扱い、それぞれ丸底と平底がある。調整は、基本的に指オサエとナデによる。

壺(丸底)(20~29) 調整は、いずれも内面を横方向にナデて外面を指オサエする。

壺(平底)(11・30~39) 体部内面を横方向にナデるもの11・30~35と、横方向にケズるもの36・37に大別される。体部内面をナデるものは、丸底気味の30~32、口縁部の内外面を横方向にハケメ調整する11がある。体部内面をケズるものには、底部もケズる36がある。38は体部内面に成形時の板状工具による縱方向の突き込み痕跡が遺存する。39は、型に粘土を押し付けて抜き取ったとみられる。

塊(丸底)(40~75) 調整は基本的に内面横方向にナデ、外面指オサエするが、外面もナデのもの40・41、平



第13図 土製人形・動物形

らな面をもつ42もある。口径4cm~5cm、器高3cm~4cm前後のものが多いが、40・43は器高2cm前後で口縁部が大きく外方に開く。44は口縁部外面に先端の丸いヘラ状工具で成形する。45・46は口縁部の一部がU字状に欠損しており、故意に欠損させた可能性がある。

壺(平底)(76~85) 調整は壺(丸底)と同じく内面横方向にナデ、外面指オサエするが、76は口縁部をヨコナデする。77はいびつな形である。

壺(丸底)(86・87) 86は外面肩部にハケメが一部ある。

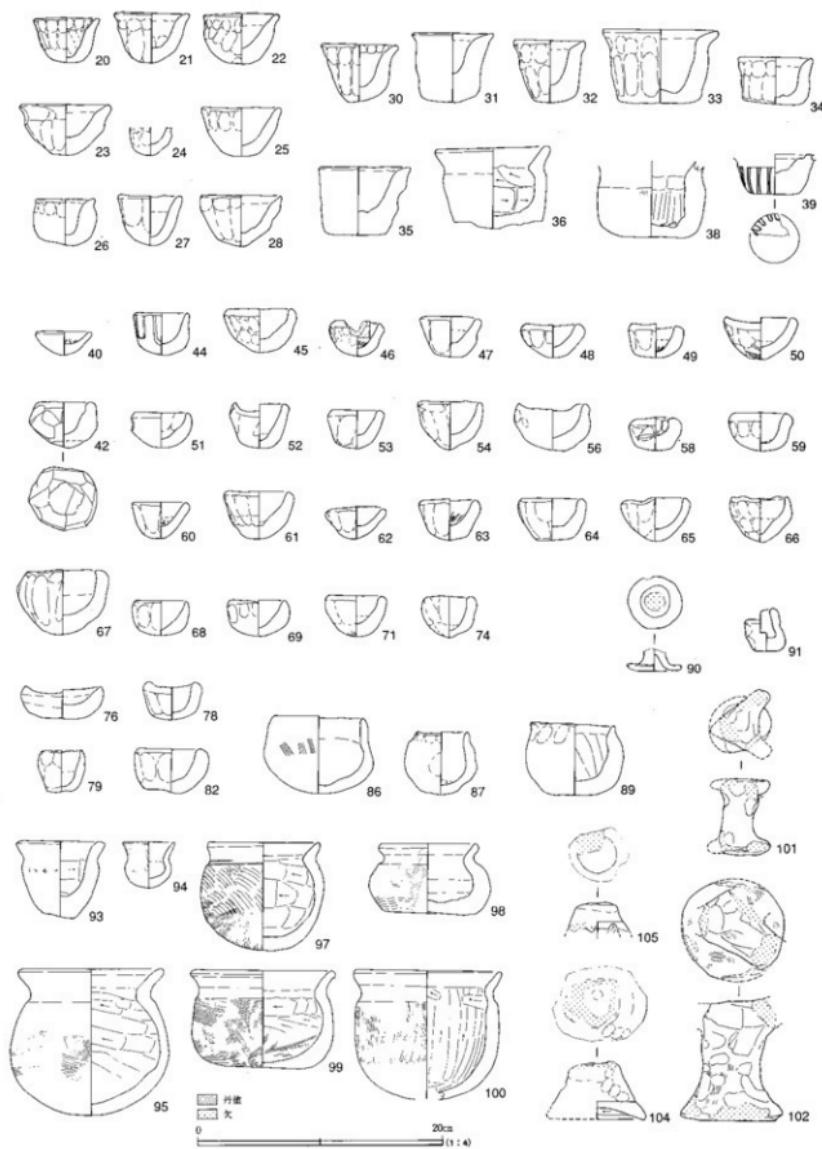
壺(平底)(88・89) 88は口縁部を横ナデする。

ミニチュア土器(93~105) 高坏は、96に代表される通常サイズより一回り小さいもの。土製支脚102・103は高さ10cm前後でセットといって良いほど似る。104・105は突起部がないものである。山陰地方にはみられないタイプで、似た形のものが近畿や北部九州にあるという。

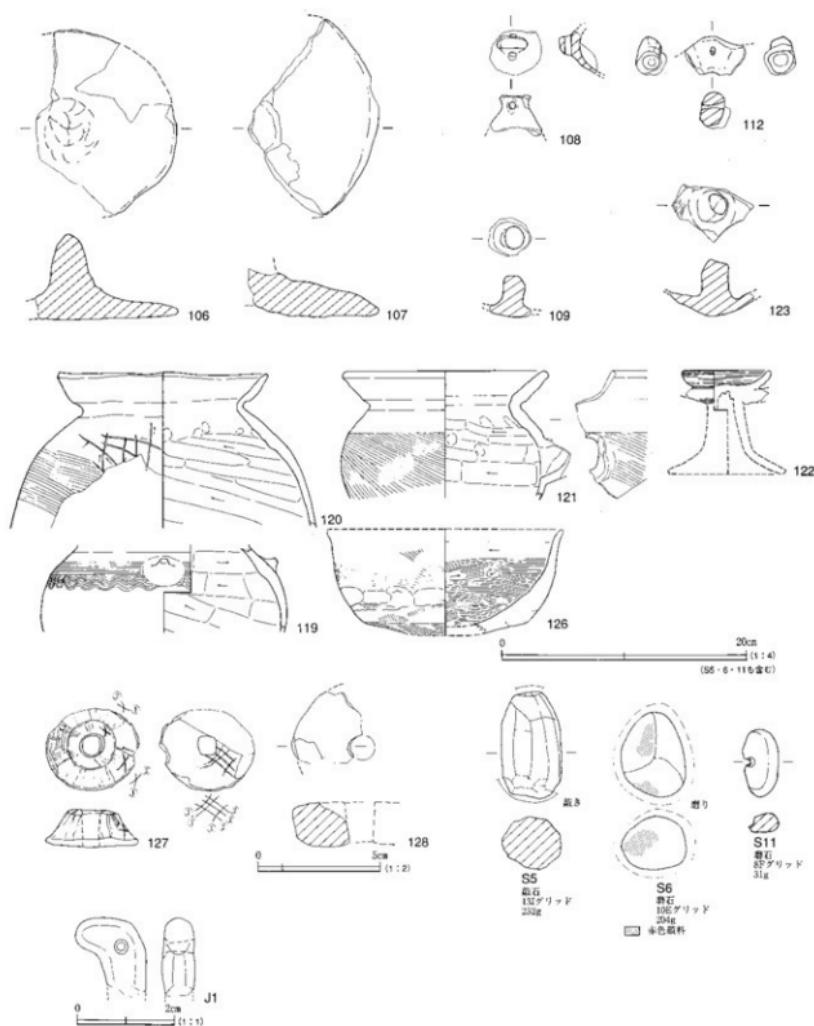
土製鏡形(106・107) 復元直径15.6cm~19.4cmの円板中央に鋤とみられるつまみだした突起をもつ。突起部に穴はない。

その他手捏土器高坏90、手捏土器臼91・92、土製鉢形108、土製紡錘車128、勾玉J1、土玉J2・J3、把手付坏123が出土。123は把手と坏底部の破片で、124・125の把手部の破片も把手付坏の可能性がある。種類が不明確のものに、109~111がある。109・110は鏡形の可能性が、111は外縁の形から楯形の可能性もある。

鉄製品(F1~13) 鉄斧F10・F11、鉄劍F1・F2、刀子F3・F4、鉄管F13、釘F12、鉄鎌F5・F6・F7・F8、鉄製品F9が出土した。このうち刀子F3・F4、鉄鎌F7、鉄製品F9、鉄管F13は手捏土器の集中する部分から出土している。鉄製品F9の形態は、長瀬高浜遺跡で祭祀遺物として報告されている劍先型鉄製品に似る。

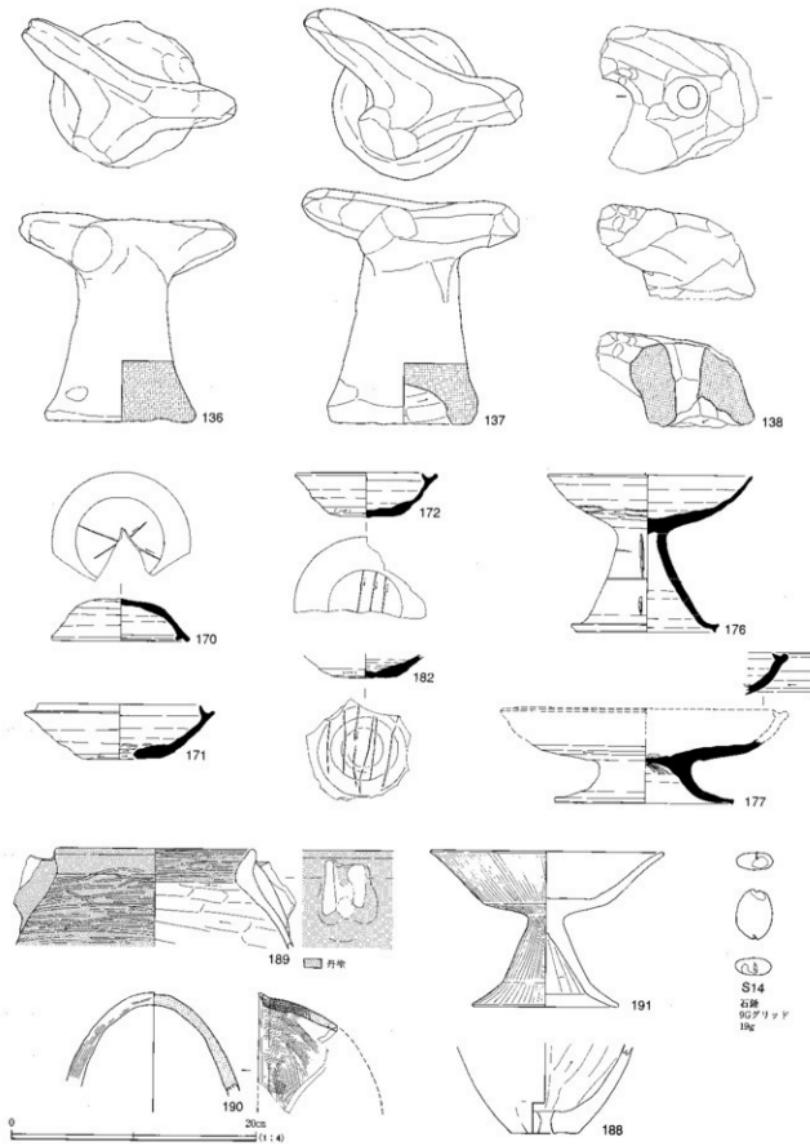


第14図 手捏土器・ミニチュア土器



第15図 祭祀関連遺物

石製品(S 1~11・127) 敷石、磨石、砥石等多くの石器が出土した。赤色顔料の付着した磨石S 6・S 7、穿孔のあるS 11、敷石の側面に面をもつS 5、紡錘車127がある。紡錘車127は表面に放射状の刻み、裏面に#状の刻みをもつ。



第16図 奈良期土器・須恵器・須生土器(庄内期)・石錐

奈良期土器甌(130・131) 壺の形に復元できたのは2点だけであった。しかし、把手部分の破片がたくさん出土しているため、この2点以外にもあった可能性はある。

奈良期土器甌(132~135) 破片が多数出土したが、完形に復元できるものはなかった。甌は大まかに2種類に分けられる。1種類は器壁の厚さが約1cm前後で、色調が白っぽく断面矩形の貼り付けた凸帯がめぐるもので出土点数はわずかである。この特徴をもつ甌は、倉吉市内において夏谷遺跡27号住居（5世紀後半）と、大山遺跡2号墳周溝内土壙底（6世紀前半）から出土している。調整は外側ともハケメのものと内側はケズリのものがある。もう1種類は、器壁が厚く、砂粒が多く含み、色調が赤褐色系のものである。形態は、上に向かって断面台形にすばまる。調整は外側ハケメ、内側ケズリで、部上端はヨコナデをする。両方の種類とも2次的に熱を受けたと推定され、内側がざらざらしている。

奈良期土器土製支脚(136~138) 破片が多く、完形に復元できるものはなかった。調整は、ナデとハケメによるが、ナデだけのものもある。形態は中実のものと、脚部内側をわずかに削って上げ底にしたもの、半球状に削ってくり抜いたもの、中空で頂部に穴のあるもの(138)がある。中空のものは、福田寺遺跡2次調査、大栄町・上種第5遺跡で出土している。

須恵器 須恵器に限っては丹念に復元作業を行ったが、時期幅があり個体数が多い割に、全形を知りうるものは小型品ぐらいで数えるほどしかなかった。個体数ほどの破片量がないのである。このことは、須恵器と同時期の土師器についていえる傾向で、それに対して古式土師器は比較的完形度が高かった。

須恵器の分布は、祭祀遺物の出土位置に重なってはいるが、同一個体の破片が相当広範囲に散在していることもわかった。例えば、大型甌が東西12m南北8mの齊合6グリッドにもまたがったり、小型甌が9Eとそこから20m離れた14Jや15Fで出土したり、横甌が遺物集中区の4グリッドとそこから28m南の18Fや18Hで出土している。このような散在状況は、供獻あるいは瘞棄の仕方が、果たして完形に近い形であったのかを疑う。谷地形であるがゆえに南斜面に自然落したであろうが、調査範囲内には破片が存在しないのであるから、谷筋に破片の一部を故意にまいたことも予想されるのである。

器種は、蓋坏・高坏・甌・提瓶・直口壺・小型壺・長頸瓶・甌がある。時期は、I期TK208段階の5世紀後半からIII期MT21段階の8世紀中頃まで存在する。量的にはTK209~TK48の7世紀代が殆どである。

時期別に分布の違いをみると、I期の破片は13ラインより南斜面には出土していないのにに対して、III期末の山陰特有の糸切底の坏は、分布の中心を12H・12Gとして南斜面は18ラインまで出土している。従って、時期が新しくなると、南低地側へ分布範囲を移動させているかもしれない。以下、特記すべき須恵器について述べる。

まず、ヘラ記号は30点、誤認したものがあったとしても少なくない量である。器種は、高坏1点以外は蓋坏類底部で外側24点内面5点、内3点が高台付坏である。記号のわかるものは「|」5点、「×」6点(170)と同化した172、182と特異な10がある。底部切り離しはヘラケズリとヘラ切りとの個数差はなく、器形の小型化が進んでおり、およそTK209~TK217段階と思われる。ヘラ記号の多いといわれるTK217段階を反映している。

当遺跡出土石製品には研磨痕が多数認められたが、須恵器坏を明らかに研磨したものが2点、(9E・10E)と(12F・12G)で出土した。祭祀遺物としてよからう。

また、当市では初めて、焼成前穿孔の焼き台(171)が1点出土した。例えば、坏(P45-168)等は内面にボロの付着が著しく、焼き歪み品というだけでなく焼き台としての可能性がある。ともに祭祀遺物集中区からの出土である。窯跡以外のところに窯道具が存在し、祭祀遺物と出土位置が一致することは重要視されなければならない。さらに、堅歛ながら赤褐色を呈す醸成焰焼成の破片が、祭祀遺物集中区を中心とする東西24m南北36mの範囲に、1グリッドに1~4片程度出土している。その他、焼き歪み品や焼き膨らみ品も、生産遺跡ではないの

にもかかわらず同様に目立った。これら不良品も、出土状況には差がないのである。奈良期土器甌と須恵器焼き台に共通するのは「火」の使用であり、「火」にまつわる供獻物として祭祀に使用され廃棄したものと考える他ない。

註

1 福岡市教育委員会編 「吉塚1」 福岡市教育委員会 1989年

2 P. 22 註2に同じ

土器観察表

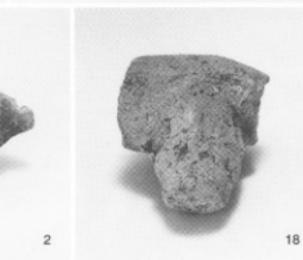
(法量()は推定値)

出土位置	№	器種	法量(cm)	形 態	手 法	地上 底面 色調 遺存度
1号土坑 床部・前部	3	奈良系 上器 环	口径 19.2 腹高 4.7	大型厚手の环。底の広い平底から外方へ擴 ぐ口縁部がつく。	口縁部凹ヨコナタ。体部・底部内外面とも ナダ。口縁部内面凸凹のまま。	2mm以下の砂粒を多量に含む。燒成良好。 研磨褐色。3/4遺存。
1号土坑 床部	4	奈良系 上器 甌	口径 (16.0)	外方へ強く折れる口縁部で体部は長脚部。	外沿部指標凹痕を残すが、体部ナダで平 滑に仕上げる。内面凹部斜次式による 横方向ナダ。体部右上方角へラケヅリ。	1~2mm大の砂粒を多量に含む。外表面成 熟褐色。内面焼成物付着。口縁部1/5 遺存。
1号土坑 前部	5	奈良系 上器 甌	LH径 (24.2)	外方へ強く折れる口縁部でやや反くのびる。 体部長脚形。	口縁部内面ヨコナダ。外側指標正丸残す。 体部外側ナダで斜面半平、内面へラケヅリ。	2mm以下の砂粒比較的多量に含む。燒成青 色。外表面青褐色。内面淡白褐色。外側薄 く研打跡。環状・体孫1/6遺存。
1号土坑 前部	6	奈良系 上器 甌	口径 (37.3)	口縁部。大型。太厚の外反する口縁部。	口縁部外側ヨコナダ。体部外側ハケメ調 整、内面へラケヅリ。	2mm大の砂粒を多量に含む。燒成ややあま い。外表面青色。内面淡白褐色。口縁部1/ 6遺存。
1号土坑 床部	7	奈良系 土 器 甌	底径 13.0 腹高 18.3	中実。	外表面ハケメ調整後ナダ。	3mm以下の砂粒を含む。燒成良好。椎茎褐 色。突起1本欠損。
1号土坑 床部	10	奈良系 环 身		底部破片。内面にヘラきさ有り。重複不規 則なし。	底部外輪へ切り落ナダ。	純良。燒成良好。硬質。燒成褐色。底部1/ 2遺存。
祭祀遺物集 中区 (9G)	93	ミニチュ ア土器甌	口径 (5.1) 最大脚径 5.3 唇高 6.8	口縁部厚形で底堅平底。LH縁部は質く外反。 外面、口縁部内面は指オサエ。脚部内面ナ ダリ。外西脇部刻文突出を施す。	外面LH縁部から最大脚部辺まで底方内のハ ケメ、以下ナダ。内面口縁部ナダ、筋隔沿 ナサエ。	1mmの大砂粒を含む。燒成良好。椎茎褐 色。LH縁部1/5・脚部1/2遺存。底部完存。
祭祀遺物集 中区 (10G)	94	ミニチュ ア土器甌	口径 4.0 最大脚径 3.6 唇高 3.7	外側LH縁部から最大脚部辺まで底方内のハ ケメ、以下ナダ。内面口縁部ナダ、筋隔沿 ナサエ。	1mm以下の砂粒。椎茎内層少含む。燒成良 好。淡黃褐色から淡褐色。LH縁部1/4 欠損。	
祭祀遺物集 中区 (10G)	96	ミニチュ ア土器甌	口径 (11.3) 最大脚径 13.0 唇高 12.1	外方へ弱くLH縁部とやや下部立ちの旋窓の 体部をもつ。厚手。	口縁部内外面ヨコナタ。口縁部外側ヨコナ ダにより底をなす。体部外側ハケメ調整後 ナダ。体部内面左方角のハケヅリ後焼成 ナダ。	3mm以下の砂粒を比較的多量に含む。燒成 ややあまい。側面凹底有り。淡黄褐色。内 面黄色強め。口縁部2/3欠損。
7F	97	ミニチュ ア土器甌	口径 9.0 最大脚径 10.0 唇高 8.9	極く外方に折り出た口縁部に球形の体部 をもつ。厚手で粗いつくり。	口縁部ヨコナタされるが型ではなし。 体部外側ハケメにより底をなす。体部外側ハケ メにより底のハケメ調整後。底部中心の一方 角の細かい目ハケメ。体部内面左方のハケ メ、全体にナダで仕上げているかのつくりは粗 雑。底部外輪とも凸凹質しき。	1~2mm大の砂粒を比較的多量に含む。燒 成酒器。淡黃褐色。ほぼ完形。
10I	98	ミニチュ ア土器甌	LH径 7.6 最大脚径 9.9 唇高 5.7	極く外方に折り出た口縁部に扁平な体部 をもつ。底部は広く上げ放し底。厚手で済 んでいる。	口縁部ヨコナタされるが型ではなし。 外側体部下端にタキヨ日紋の花形が残る。 はとんをナサ消しているが、削記焼成 角のハケメを残す。裏肩部左方角のハケメ。 全体にナダで仕上げているかのつくりは粗 雑。底部外輪とも凸凹質しき。	2~3mm大の砂粒を比較的多量に含む。燒 成酒器。脚部一部底面剥離。外表面褐色。 内面全体と外表面の1/3に黒斑。ほぼ完形。 体部外側舟彫?痕跡。
祭祀遺物集 中区 (10H)	99	ミニチュ ア土器甌	口径 (11.1) 最大脚径 11.5 唇高 8.1	広い底盤から錐状の体部をつくり。LH縁部 は外反させて丸くおさめる。体部下部立ち み。底堅平。	LH縁部内外面ヨコナタ。体部外側横方向の ハケメ調整後。横方向のハケメを施す。内 面凹部左方角のハケヅリ。底部内面左方角 のハケヅリ後、底部ナダでハケメ調整し 輪郭を平滑にする。全体に丁寧なつくり。	3mm大の砂粒を含むが1mm以下の砂粒を 比較的多量に含む。燒成良好。研磨褐色。 口縁部2/3欠損。
祭祀遺物集 中区 (10G)	100	ミニチュ ア土器甌	口径 (11.7) 最大脚径 (11.7) 唇高 10.7	極く外反する口縁部に球形の体部をもつ。 厚手。	口縁部内外面ヨコナタ。体部外側横方向の ハケメを施す。	1mm以下の砂粒を多量に含む。6mm大をも 含む。燒成青器。外表面灰化物付着。粗 雑質。口縁部1/4、体部1/3遺存。

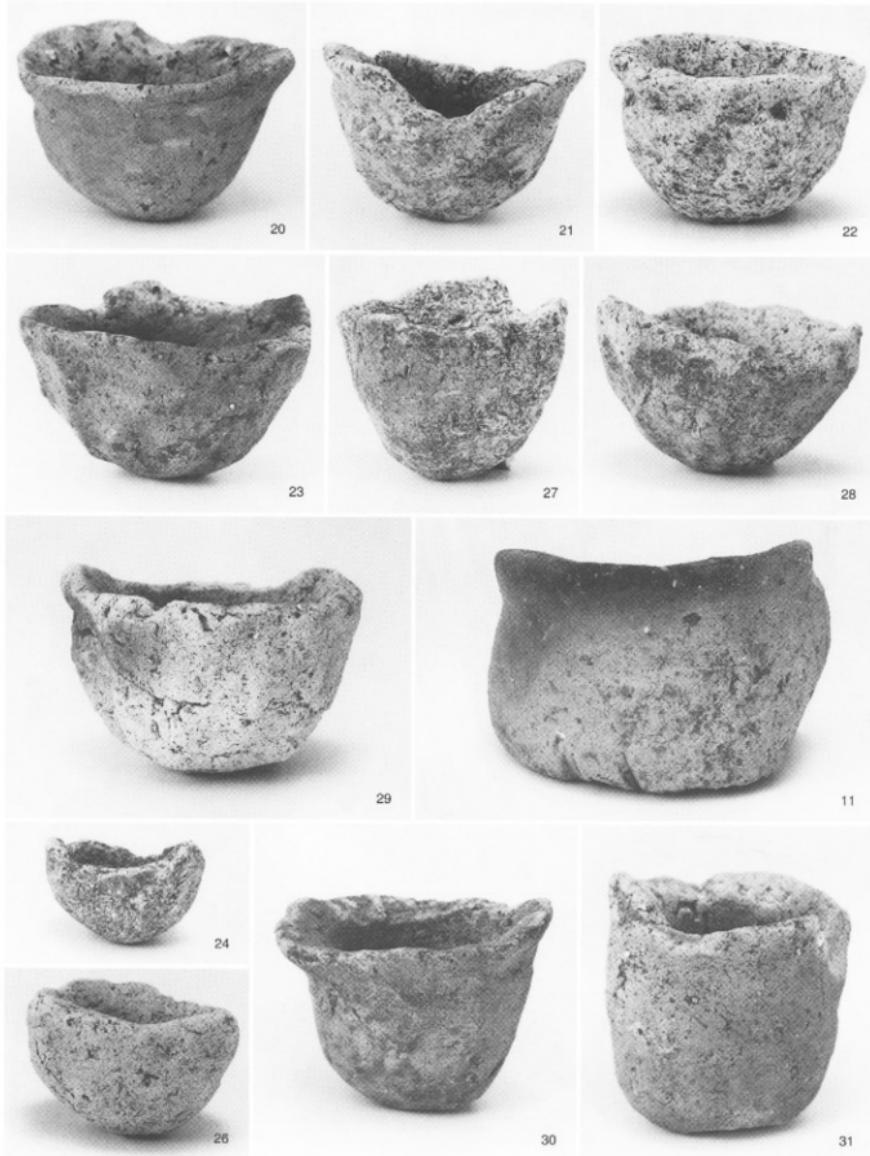
(法量()は推定値)

出土位置	No.	器種	法度(cm)	形 素	手 法	黏土 搾出 色調 遺存状
11H	101	ミニチュア 土 筒 土製支撑	器高 6.3	底部は中実で軽く、底部はウッパ状に広がる。底面は丸みを帯びる。	全面をナメで仕上げる。	1mmの大粒状・茶褐色の粒子含む。焼成済。灰白褐色。充実部分・縁部欠損。
11H	108	ミニチュア 土 筒 土製支撑	器高 (10.0)	底部は中実。底面はほぼ平ら。	全面ハケメ調整の後、糊オサエ、ナメで仕上げる。高麗や形容形もしくは粘土箆から分離せられたと考えられる繊い棒状工具を底面に差し込んだ痕跡がみられる。棒状工具は主に3方向から斜めず開脚をあけて逆U字型でいる。	1~3mmの大粒状・茶褐色粒子多量に含む。焼成済。灰白褐色。充実部分・縁部一部欠損。
子備遺集 表振	104	ミニチュア 土 筒 土製支撑	器高 4.8	台状で底部が広がる。底面は上げ底。	上面・底面は指オサエ。底面はナメ。	2mm以下の石英粒子含む。焼成良好。洪積褐色。縁部欠損。
12G	105	ミニチュア 土 筒 土製支撑		台状で底部が広がる。	上面・側面ナメ仕上げ。底面は工具によるかき取り。	難見。焼成良好。褐色。上部のみ遺存。
祭祀遺物集 中区 (9 G)	119	瓦と土器 (注内蔵) 突起耳壺	最大径 (20.0)	肩部縫7cm横10cmの発掘をする被片。突然先端は摩滅しているが、これ以上にのびるかんじではない。肩部外側両側縫既破壊がめぐる。	体外部外ハケメ調整を施す。内面左方向のヘラタグリで上縫のみ右方向。ケズリの部位は剛健で無い。	3mm以下の砂粒を比較的多量に含む。焼成不良。表面磨滅著しい。淡乳白色から淡褐色灰色。
11H・12H	120	土器	口径 15.0~17.0	口縁はくの字状口縁で、体部は鼓形。肩部外縫にへき縫有り。記号はL字縫を下にして縫4本縫4本。	口縫部内外部とも横方向のナメで泥。外縫体部ハケメ調整後糊オサエ。体部内面左方向のヘラタグリで上縫のみ右方向。ケズリの部位は剛健で無い。	3mm以下の砂粒を比較的多量に含む。焼成不良。淡乳白色。口縫~肩部1/2まで。
12H	121	土 壷 口部土器	口径 (16.0) 最大径 (17.2)	口縫はくに外反するくの字口縁で、端部は丸い。体部は鼓形。肩部と底部との境界は接をなす。肩部に口縫を行ける。	L字縫内内蔵泥コナメ。肩部外側横方向のナメ。肩部内面左方向のヘラタグリで糊ナメ。体部内面左方向のヘラタグリで糊部まで及ばない。ケズリ後の指標既残る。	3mm以下の砂粒を比較的多量に含む。焼成済。表面磨滅。淡乳白色。口縫部1/12、肩部1/4遺存。
11E	122	土 壷 具蓋高环	受台径 7.0	环状内蔵ノ受台をつけたもの。受台は浅く、端部は内削して高く終る。脚部との接合は端部に凹凸をそらく両側の脚部がくっつむ。脚部は丸い。	受台部内蔵泥と殊なヘラ先によるヘラミガキ。环状内蔵泥糊方向のヘラミガキ後糊泥ナメ。	1mm以下の砂粒を比較的多量に含む。焼成良好。明褐色。受台部3/4遺存。
祭祀遺物集 中区 (9 H)	123	土 壷		环の底部内部に把手がつく。	环部内蔵ナメ、内把手をつけた後ハケメ。把手部分はナメ。	1~2mmの大粒状の石英含む。焼成良好。洪積褐色。把手部と环状泥の遺存。
15F	126	食 良 瓶 土 筒	口径 器高 (8.7)	底部は広く深い鉢狀を呈す。体部の器壁は厚く、口縫はくにほど深くなる。端部は遺存してはいないが、口縫部の外反の度合がいからほほ口縫部に連れていて予想される。	体部外ハケメ調整とナメ、底辺側部を明瞭に焼す。底辺部糊薄く、ハケメ調整。体部内面ハラタグリ後ハケメ調整。	3mm以下の砂粒を比較的多量に含む。焼成良好。明褐色。瓶部1/3遺存。
8 G	188	弥生土器 (注内蔵) 裏	底径 5.4	厚手の平底。焼成前の炉孔直約1.0cm有り。	外側体部ナメ、底面ハケメ。内面体部上方のヘラタグリ。	2mm以下の砂粒を比較的多量に含む。焼成良好。燒黄褐色。底部1/4遺存。
子備遺集 第7トレンチ	189	弥生土器 (注内蔵) 裏 蓋 蓋 入 品	口径 (16.0)	口縫部は強く外方へ開き丸おさめる。体部鼓形。口縫部近くに番状把手を行ける。	口縫部内蔵泥コナメ後、口縫部内面と体部鼓形。口縫部近くに番状把手を行ける。	1~3mmの大粒状の砂粒を比較的多量に含む。焼成良好。外折丹青。把手部内側に糊跡は無い。外側は褐色、内面は黄褐色。一部外側黒斑有り。口縫~体部1/4遺存。
8 H・12G	190	弥生土器 (注内蔵) 手 槌 形 土 筒		蘇鉄片2片。体部は内削し、端部は外方に強張して頭をなす。往來不明をがら頭化。	内削部ともハケメ調整。内削には粘土糊痕を残す。	2mmの大粒状を含むが粗良。焼成済。淡褐色。底部1/3遺存。
祭祀遺物集 中区 (10 G)	191	弥生土器 (注内蔵) 高 环 蓋 入 品	口径 (18.7) 器高 12.8	环縫は屈曲して大きく外反し、器部はラック状に強く開く。	环縫部外側及び环縫内蔵泥方向のヘラミガキ。环縫部内蔵泥。底面左方向にくり抜く。	0.5mm以下の砂粒を多量含む。焼成不良。表面磨滅著しい。明褐色。ほぼ完形。

土製人形・動物形、手捏土器高坏・白



手捏土器壳





32



33



34



35



36



37

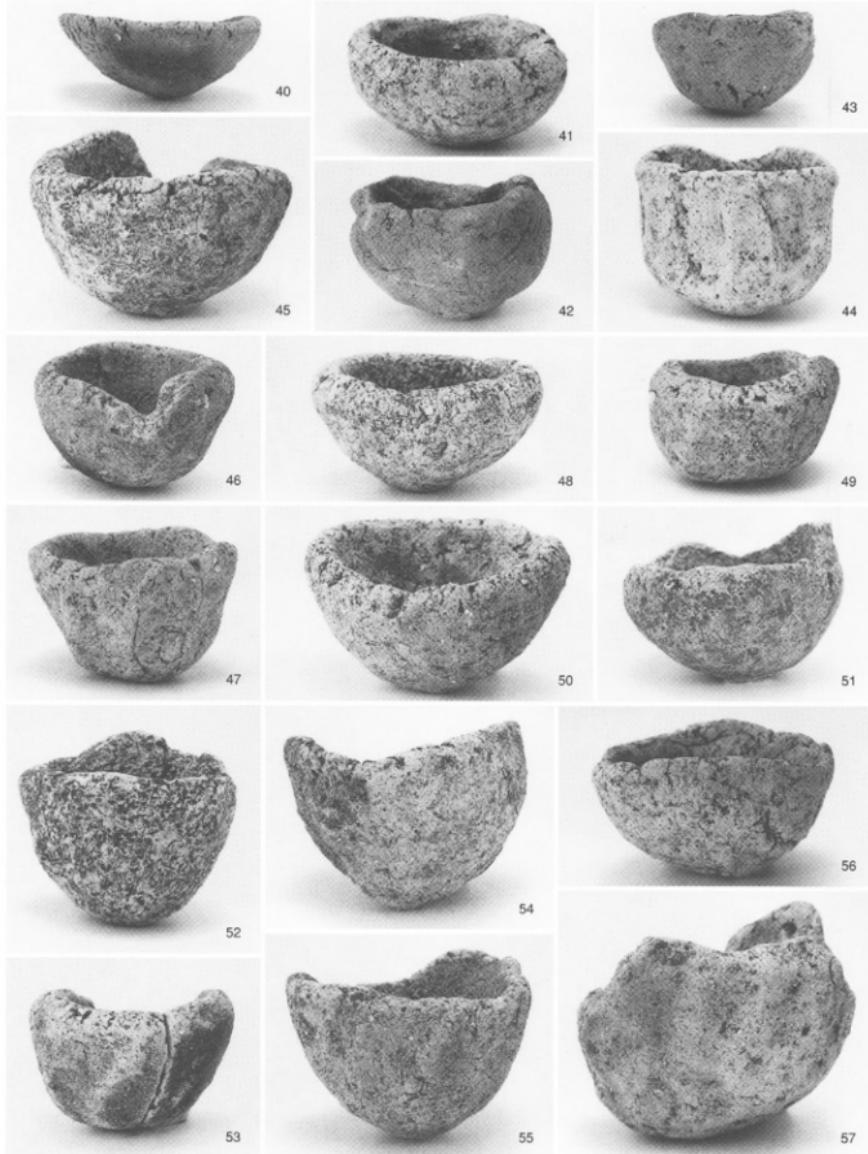


38



39

手捏土器碗



手捏土器塊



58



59



60



61



62



63



64



65



66



67



69



72



70



71

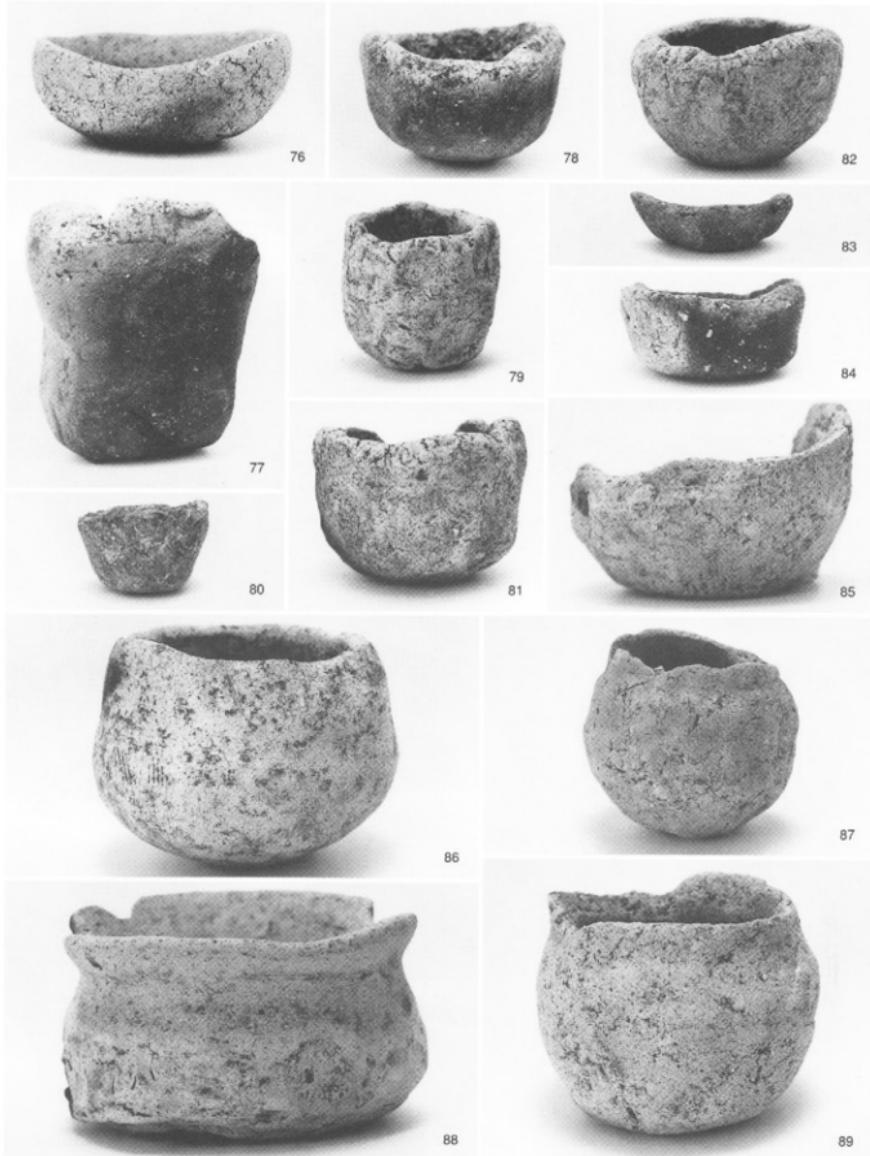


74



75

手捏土器塊·壺



ミニチュア土器



98



93



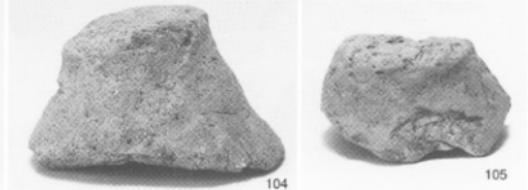
97



99



96



104



105



101

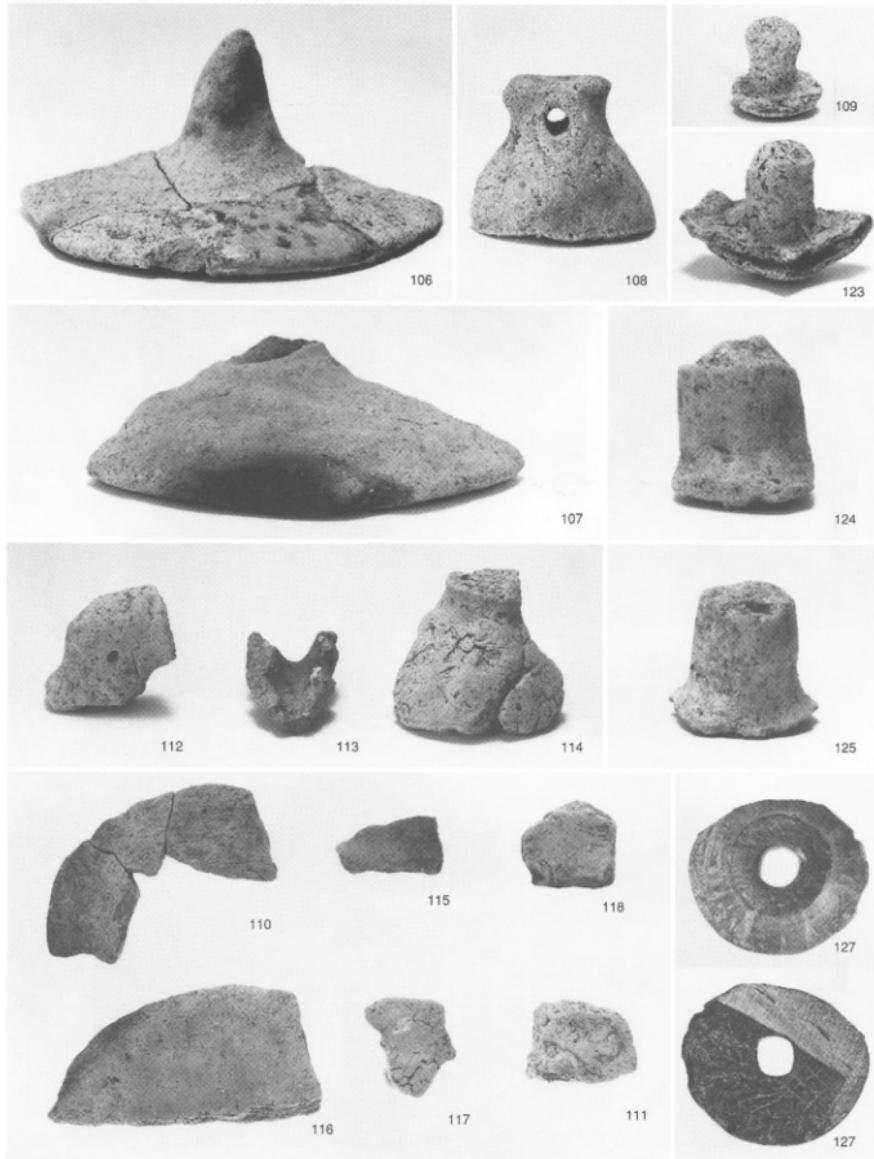


102



103

土製鏡形・鈴形、不明土製品、土師器把手付坯、紡錘車





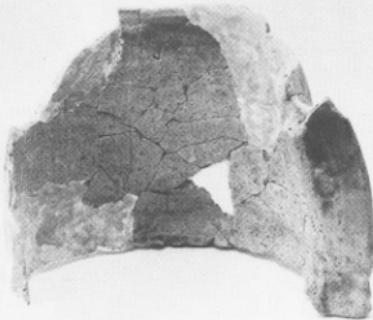
3



129



130



133



131



132



135



134

奈良期土器・土師器



7



8



9



138

甕



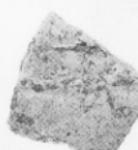
158



159



160



161



162



163



164



165



166



167



184



183



139



140



141



185



142



143



144



144

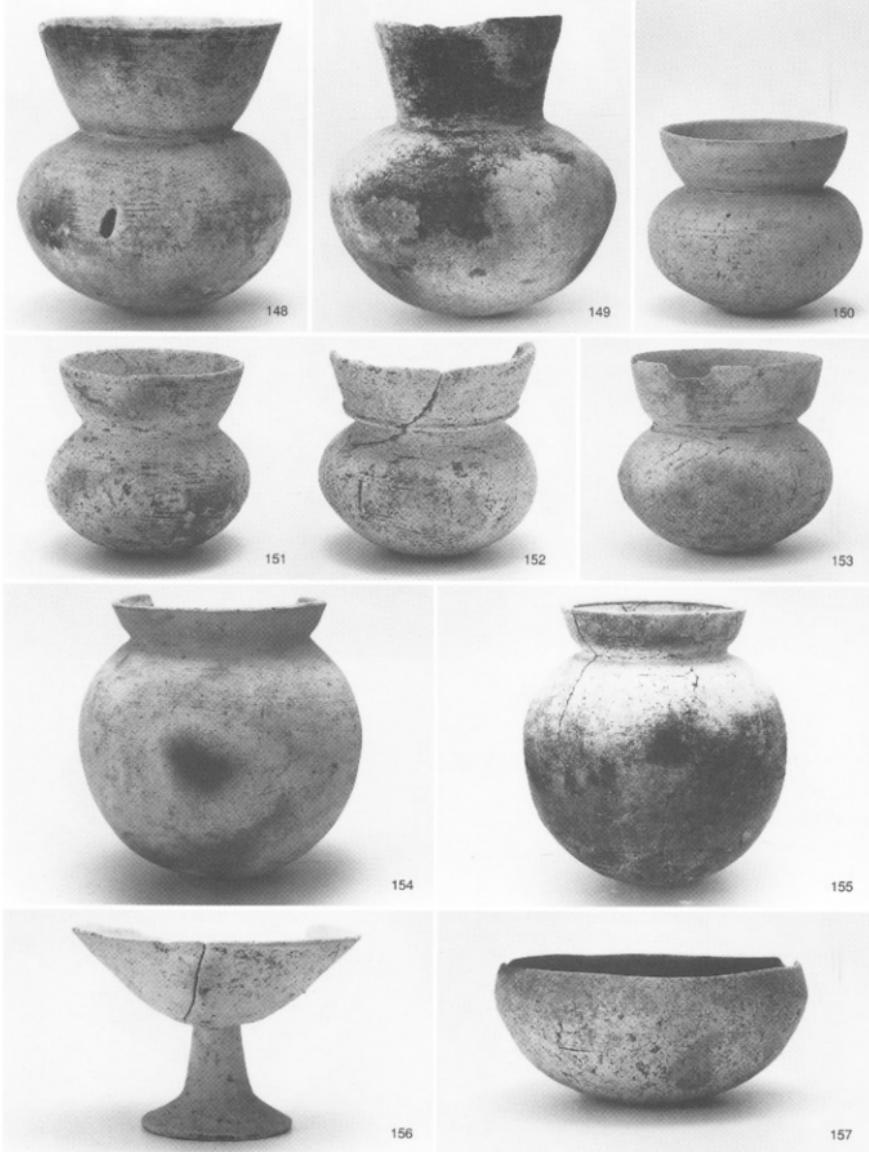


145



146

土師器





168



175



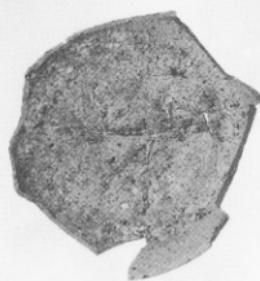
174



180



181



176



173



179



186



191



187

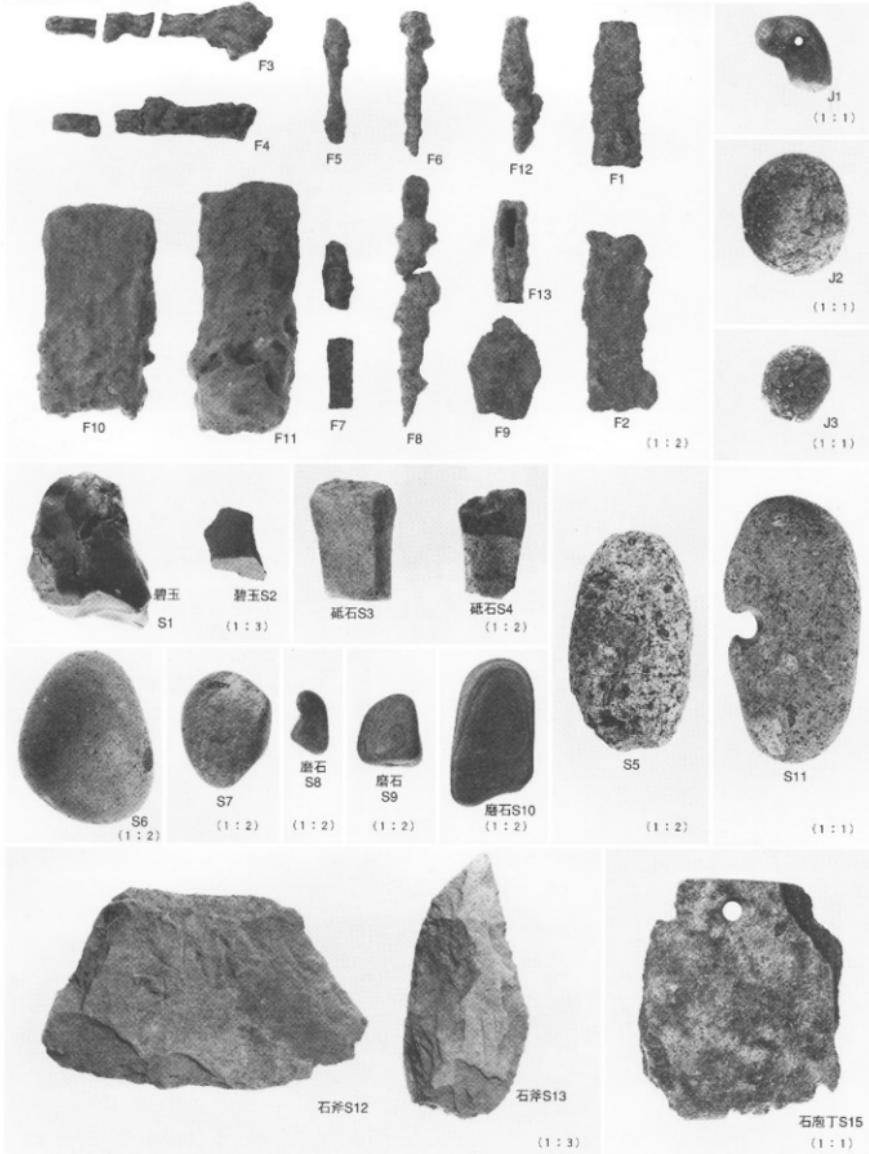


189



鼓形基台（スタンプ文）192

鐵製品・玉類・石製品



IV まとめ

上神宮ノ前遺跡では多量の遺物が出土した。このためすべての遺物を把握し、整理できていない現状ではあるが、これまでにわかったことを祭祀遺物を中心に整理し、まとめとしたい。

上神宮ノ前遺跡は、弥生時代後期（1号住居）から5世紀前半（2号住居）にかけて集落として機能していたものが、何らかの理由で集落が廃絶され、祭祀遺物の廃棄場所として使われ始めたと考えられる。

5世紀代は、10G・11Gグリッドを中心とする土器高坏・小型丸底壺が集中して出土する。その中には1点のみミニチュア土器の壺がある。

古墳時代後期は、土器壺・甌・高坏・台付壺が出土する。土器のなかには、焼成後の穿孔をもつものもある。明確な土器の集中は無いが、尾根筋からの転落遺物とするには遺物量が多すぎるため、祭祀に使用した遺物である可能性が高いと考える。

7世紀代になると、土製人形・動物形・器財形の土製品、手捏土器といった祭祀遺物が9Gポイントを中心として、奈良期土器甌・甌・窓・土製支脚が破片の状態で9H・10Hグリッドを中心に出土する。須恵器は手捏土器の集中出土付近でTK209～TK48が出土し、周辺では8世紀中頃の須恵器も出土する。このため、7世紀を中心として、8世紀代までの祭祀遺物と推定され、浅い谷の北側では土器焼成坑が造られ、土器の生産が行われた。

これら祭祀遺物は、出土状況からここで祭祀が行われたのではなく、別の場所で祭祀を行った後、浅い谷地形のこの場所に、5世紀～8世紀の3百年余りにわたってその時に廃棄を行ったものであろう。

同じ上神地内の谷畑遺跡も、祭祀後の土製模造品を中心とする遺物を谷に廃棄するという点で類似している。しかし、谷畑遺跡で出土した有溝円板、器台形、鉤形は、上神宮ノ前遺跡に無く、組成に違いがある。また、谷畑遺跡の場合は3～4個を入れ子にして大きな木の根元に寄せ集めた状況が想定されているが、上神宮ノ前遺跡は廃棄における規則性がない。谷畑遺跡の祭祀を実修した集団は、谷畑遺跡に隣接する5世紀代～6世紀後半の古墳群と集落である西山遺跡の集団であると推定されているが、上神宮ノ前遺跡の祭祀を実修した集団の集落については全く不明で、今後の課題であるといえよう。

報告書抄録

書名	上神宮ノ祭事調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	吉田文化財調査報告書							
シリーズ番号	第98集							
編著者名	加藤誠司							
編集機関	吉田市教育委員会							
所在地	〒682-8611 高取町吉田市高町725番地 TEL 0858-22-4419							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
所蔵道跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡記号					
上神宮ノ祭事調査	吉田市上神宮ノ前	31205:4 Y KM	35° 27' 31"	133° 47' 28"	1997.11.11~1998.3.23	2,000	民家の土地造成工事	
所蔵道跡名	種別	主な時代：主な遺構		主な遺物			特記事項	
		縄文	古墳					
上神宮ノ祭事調査	縄紀・秦略	縄文	：竪穴式住居	2基	土葬人形、土葬動物形、土製鏡形、土製鉢形、土握土器、ミニチュア土器、余呂崩土器、土壙器、牛牛土器、陶文土器、須恵器、弦紋車、弦紋車、刀子、鐵鏟、鐵斧頭、勾叉、土瓦、石斧、石斧、石瓶丁、砾石、砾石	祭祀遺物を復元化に複数、焼成坑の範囲で土葬人形、ビットから七輪動物形が出た。土器器種度にかかる祭祀とみられる。		
		弥生	：竪穴式住居	1棟				
		古墳	：竪穴式住居	3基				
		古墳	：竪穴式住居	1棟				
	秦	：土葬符號燒成坑	1					
	秦	：土葬符號燒成坑	1					

上神宮ノ前遺跡発掘調査報告書

平成11年3月31日 印刷

平成11年3月31日 発行

編集 発行 倉吉市教育委員会

印刷 製本 勝美印刷株式会社
